



# あるがままの ボクたち

横井 秀治

## 最初に

二〇一六年七月二十六日、相模原市のある施設で十九名の人たちが、殺害されてしまった事件が起きた。それを知ったのは、日本にいる知人からだった。

大きなショックを受け、切ない気持ちになった私。しばらくの間、彼ら一人ひとりの命の尊さを思い続けたのだった。

そうすると、以前、知的発達遅滞の人たちが暮す施設で働いていた経験から、また今はダウン症の息子を持った父親の立場から、胸に溜まっているものを表出したいくなった。

では、どのようにしたら、それを表現できるだろうかと考えた。そうすると、息子が周囲をどのように見ているかを、文章にしてみようと思い立った。が、今もことばで意思を伝えることができない彼でもあるし、それに日常会話はドイツ語なこともあって、それは難しいだろうとも思った。

しかし、毎日彼と一緒に暮らしている中で、彼の気持ちになって、彼の観点から、想像力をはたらかせて、大胆に書くことは可能だと思った。

さいわい、長年に亘って発行してきたテュービンゲン便りに、息子に関して載せた文章があったので、それらのいくつかを参考にして、文の語尾に気をつけながら書きはじめた。

でも、想像してよりも難しく、果たして最後まで書き続けることができるだろうかとの思いとなった。それにあまりに個人的、私的なことを綴ることになるので、どうしようかと迷った。

しかし、どうしても仕上げたく、何度も書き直しながら、やつとでき上がったのが、この「あるがままのボクたち」だった。

書き出してから作業の途中、過去に経験した自分を再び思い出し、それが至福の時間ともなった。もちろん、過去に間違ったことや嫌なことや誤ったことも多くあった。しかし、それを新たに認識することによって、さらに生きる力が増してきたこともたしかだった。

息子と暮らして、四十三年が経った今も、彼の無邪気な笑い、それに毎日あるがままに、過去のことでもなく、未来のことでもなく、今を生きている彼の姿が、羨ましいと思う時がしばしばある。

と同時に、彼と生活する日々のなかで、愛する心が希望をもたらししていたのを知ったのもたしかだった。

なお、障害という語を、ここではいっさい使っていない。

## 目次

|      |                   |
|------|-------------------|
| 序章   | 二つの手              |
| 第一章  | ボクの誕生             |
| 第二章  | パパの願い             |
| 第三章  | 木の手作りおもちゃとボク      |
| 第四章  | 九さんと遊ぶボクたち        |
| 第五章  | 青い瞳のおばあさん         |
| 第六章  | もう一人のおばあさん        |
| 第七章  | ボクたちの新たな生活        |
| 第八章  | 地域の一員となったボク       |
| 第九章  | エーデルワイスを見つめるパパとママ |
| 第十章  | 大晦日は雪の森で過ごすボクたち   |
| 第十一章 | おばあさんとの別れ         |
| 第十二章 | ボクが生まれ、育ったところへ    |
| 第十三章 | 働きはじめたボク          |
| 第十四章 | タンデムに乗るボク         |
| 第十五章 | ボクたちの仲間たちが        |
| 第十六章 | 体で表現するボクたち        |
| 第十七章 | グループホームに挑戦するボク    |
| 第十八章 | 三十歳の誕生日           |

第十九章 ボクの小指一本が

第二十章 皆の前で話すパパ

第二十一章 寄り添ってくれるママたち

第二十二章 パパたちの祈り

第二十三章 ママの願いが叶う

第二十四章 再び、ママとパパと暮すボク

## 序章 二つの手

「なぜ、生まれたのかって？」

それは、すべての生きものと同様に、ボクの命が世のなかで必要とされ、意味を持っているからだ。たとえ、このような身でもね。

いや、だからこそ、皆と一緒に生きていくなかで、ボクの命は輝き、まわりの人たちによるこびをもたらししているのだ。

それをはじめて体験したのは、命が芽生えて、間もない時のことだった。

体が溶けそうになってしまった。このままでいたら、消えてしまうに違いない。と、今まで激しく揺れていたボクの小さな体が、止まって動かなくなった。と同時に、優しく撫でる二つの手があったのだ。

一つは柔らかく、もう一つは硬かったのだ。

その二つの手が、ことばを交わしていた。

「急にお腹の調子が悪くなったと言ったので、直ぐここの病院へ駆けつけたのがよかったね」

「そうね。あなたのお父さんがタクシーを呼んでくれて」

「まさか、体長十五センチの小さな命が、きみのお腹に宿っていたとは思っても寄らなかったよ。流産をしないで本当によかった。ドイツのチュービンゲンから、ここ東京に来て、二週間が経ち、目まぐるしい日々が続いたよね。きみにとっては、緊張した日々だったに違いない。お腹にも、その影響が出たのだろう」

「そうかもしれないわ。でも、妊娠していたとは知らなかったわ」

「きみは呑気なところもあるからな。とにかく、実家近くに病院があったのがよかった」

「まったく、その通りね」

「きみにとっては、初めての日本の地。何かとドイツの文化や習慣が違うので、戸惑うことが多くあっただろう。まして、この暑い夏、参ったのでは？」

「そうね。この湿気、今まで体験したことがなかったわ」

「きみが暮らしていたドイツの夏は、湿気がそうなかったからね。それにしても、よくついてきてくれたね。きみとベーターで知り合ってから、八ヶ月後には結婚し、それから日本に来たのだから」

「あなたは、わたしの夫。一緒に行動するのは当たり前だわ」

「でも、一人住まいの、きみのお母さんと別れるのは辛かったのでは？」

「そんなことはなかったわよ。母は、わたしの日本行きに賛成だったし」

「そうだったね。きみにとっては、日本はまったくの未知の国。とにかく、二人で力を合わせて暮らして行こう」

「そうしましょう」

「今のお腹の調子はどうなの」

「いいわよ」

「きみに見守れながら、小さな命は懸命に生きようとしたのだよ」

「そうよね。この新しい命、うれしいわ」

「あと八ヶ月したら、産まれてくるとドクターは話してくれたね。きみは慣れぬ地なので大変だろうが、頑張ってほしい」

「もちろんよ。お腹にいる新しい命と一緒にね」

柔らかい手がお腹を撫でると、ボクの体は一回転したのだった。

翌日、硬い手と柔らかい手は、手を重ねながら話をしていた。

「昨日、病院から戻ると、母から『きみは三十二歳、初めて子供を産むにはすこし高齢なので、羊水検査を受けたらどうか』と勧められたよ。母は心配してそう言ったのだろうが。でも、『その必要はない』と答えたからね」

「わたしも、そう思うわ。このお腹のなかに宿っている命、私たちによるこびをもたらした命、どんなことがあっても産むわよ」

「とにかく、きみの体が落ち着くまでのあと四日間、ここにいて、それから退院だ。それ以後は、いつもの生活に戻れるとドクターが話してくれたからね」

「そう」

「それと、今日の朝、よい知らせが入ったのだよ。ドイツから職を求めて書き送った施設からで、そこで指導員として働いてもよいとの返事だったよ」

「それは、よかったわね」

「うん、これでひと安心だ」

「そうね」

「東京からすこし離れた浜松の地で、二人、いや三人の暮らしとなるね。ここを退院してから、再び実家で一週間ほど過ごしたのち、採用してくれた施設に行くことにしたからね」

「わかったわ」

## 第一章 ボクの誕生

六畳と四畳半、それに小さなキッチンがついたプレハブ造りの職員寮で、二つの手の新しい生活がはじまったのだ。

硬い手がこの職場を選んだのは、牧師家庭で育った柔らかい手だったので、キリスト教の教えを背景としたところだったら、ドイツとは異なる日本の生活様式に、いくらか馴染んでくれると思ったからだだった。

柔らかい手が暮らし出して最初に困ったことは、トイレだった。腰かけて用を足す部類ではなく、しゃがんでする汲み取り式のタイプだったからだ。早速、硬い手は、初任給で洋式の簡易便器を購入し、それをよろこんだ柔らかい手だった。

家のなかには家具がなかったもので、二つの手は簡易のソファとテーブル、それに食器類を近くのスーパーで買い求め、生活ができるように整えていったのだ。

蒲団は、施設のお客さん用に使われていたものが支給され、畳の上で寝るようになった

柔らかい手だった。

硬い手は、柔らかい手が畳の上で寝られるどうか心配したが、何の問題もなかった。反対に、蒲団が押入れに納まるので、居間兼寝室のスペースが広がるのである。こんな柔らかい手だった。

柔らかい手のお腹のなかで、へその緒が結ばれて栄養素や老廃物などのやり取りがもうはじまり、次第に大きくなっていったボクだった。

と同時に、聴覚がより発達して、柔らかい手が吹く縦笛の音がよく聞こえ、そうすると、拍手をする代わりに、足でお腹を蹴ったりもするようになったのだ。

日本の民謡や童謡を二、三回耳にすると、柔らかい手はもう笛でその曲を奏でることができたのだ。ボクとのコミュニケーションは、その時点でもうはじまっていたのだ。とにかく、柔らかい手のお腹のなかは居心地良く、とくに、ボクによく語りかけてくれたのがとてもうれしかった。

それにしても、柔らかい手は大変だったのだ。初めてのお産、それにドイツ語を話す人がまわりに住んでなく、日本語をまったく話せなかったからだ。

でも、家の近くにキリスト教会が建っていたので、そこによく出かけるようになり、そこで知り合った人と英語で話したり、その人を家に招いたりもするようになっていったのだ。

それと、キリスト教組織団体の『母の家』が近くに建っていたので、そのシュベスタ―（奉仕女）との交わりに、よろこびを見出していた柔らかい手だった。

社会性を重んじている柔らかい手だったので、買物に出かけたりすると、すれ違う人とかならず「こんにちは」と笑顔で挨拶を交わし、まわりの人たちと交流を持とうとしていた。

硬い手は時間があると、柔らかい手に日本語を教えていたが、日常会話はドイツ語だったので、柔らかい手の日本語は上達していかなかったのだ。それに硬い手の勤務は、当直や早番、それに遅番などもあったりしていたので、柔らかい手は戸惑ったりもしていた。

ある日、施設内で行われた秋の運動会に、柔らかい手は参加し、パン食い競争で二等賞をとったことがあったのだ。その時のよろこびが伝わってきて、ボクの体は何度も回転したのだ。

そのような二つの手の生活が七ヶ月間続き、ボクが産まれる予定日の二週間前だった。ボクの体を優しく包んでいた羊水が、急におかしくなってしまったのだ。

柔らかい手は、トイレに駆け込んだあと、六畳の居間で体を横たえてから大きな声を張り上げたのだ。それを聴いた隣に住む人が玄関のドアを開け、柔らかい手のところに駆け寄り、そのあと、硬い手の職場に電話をかけたのだ。

それから間もなくすると、息を切らせながら家に戻ってきた硬い手に、隣の人が、「破水となっていますよ」と知らせたのだ。

ボクと柔らかい手は、隣の人が運転する車で近くの病院へ向ったのだ。

病院に着くや、分娩室に運ばれた柔らかい手とボクだった。

柔らかい手はすこしも動揺した様子もなく、平静だったが、硬い手はソワソワして落ち着きがなかったのだ。その硬い手に、看護師が、

「ドアの外で待っていてください」

と、言ったのだ。それに従った硬い手だった。柔らかい手は、硬い手が傍にいて、ボク

が産まれる瞬間を見てほしかったのに。それに男性医師も勇気がなかったのか、室外で待たせようとしたのだった。

柔らかい手の残念がった気持ちだが、ボクに伝わってきたのだ。柔らかい手の気持ちを察して、医師にお願いすればよかったのに、それをしなかった硬い手だった。

ドアの外で三時間待ち続けたあと、硬い手はボクの産声を聴いたのだ。

一九七八年三月一九日二三時四五分に、ボクは生まれたのだった。この時から、柔らかい手はママ、硬い手はパパとなったのだ。いや、ボクの命が宿った時から、パパとママだったのだ。

パパは直ぐにボクとママのところに来ようとしたのだったが、看護師に、

「明日、会ってはとうですか」

と言われ、それにまた従ってしまったのだ。

翌朝、パパはベッドの上で横たわっているママのところに来て、よろこびに満ちた目でボクを見つめたあと、ママに、

「ごろうさん。色が白く、ばっちり二重瞼で整った顔だ。ありがとう」

と、優しい声で言ったのだ。それを聴いたママは、にっこりしたのだった。

それから五日してから、ボクたちはタクシーに乗って帰宅したのだった。

ボクの名前は男か女かわからなかったのだ、二人とも考えてなく、数日してから、ママがドイツ名でミヒヤエル、パパが日本名であそぶと名づけたのだ。

ママの乳をほとんど吸わなかったのだ、ママは自分の乳を哺乳瓶に入れて飲ませようとしたのだが、ほんのわずかししか飲まなかったボクだった。

ママが、パパに話し出したのだ。

「お乳をほとんど吸ってくれないわ。一日にどれくらい飲んだかわからないわ。こうやって哺乳瓶に入れて飲ませると、いくらか飲むけれど。ほら、このノートを見て。毎日、彼が飲んだ量が記されているでしょ」

パパは、そのノートを見続けながら、

「昨日の朝六時は六〇cc、お昼は五〇cc、夕方の六時は五〇cc、真夜中は六〇cc、合計すると一日に二二〇ccか。産まれたときが、未熟児すれすれの二、五五〇グラム。それから二週間経っても、二、六四〇グラムの体重か」

とつぶやいたあと、こんどは力強い声で言ったのだ。

「でも、これから吸いつくように飲むよ」

「そうよね。こうやって乳を搾り出す必要もなくなるでしょうね」

そう応えたママだった。

ママはボクに哺乳瓶の乳を飲ませようとしたのだが、ボクはあまり飲まなかった。飲みたいという欲求が、体から生じてこなかったからだだった。

ママの乳を飲まないのを拒否したボクの姿を見ていたパパが、ママに言ったのだ。

「なぜ、彼が乳を飲まないかを、きみの担当看護師に直接訊ねてみようか？」

「それはいいわね。あの看護師さん、とても優しくったわ。乳を飲ませる工夫が何かあるかもしれないわね」

「よし、彼女を家に呼ぶことにしよう」



「それは、いいわね」

ママとパパが招待した人が家にやって来たのだ。その人に、ボクがあまり乳を飲まず、体重も増えないことをママが伝えると、その人はボクを抱いてから乳の飲ませ方を教えはじめたのだ。しかし、ボクはいつものように飲む気がしなかった。

その人は一時間ほどいてから、帰ることになったのだ。

バス停までその人を送って行く途中、パパは思っていることを話し出したのだ。

「息子はあまり泣かないし、おとなし過ぎるのです。もしかしたら、彼はダウン症ではないでしょうか」

「いや、そんなことはありませんよ」

暗い夜道だったので、パパはその人の表情を読み取ることができないでいた。

「仕事柄、彼らのことはわかっていきますので、本当のことをおしやってください」

「いえ、そんなことは」

パパはもうこれ以上訊ねることはできないと思い、訪問してくれたことにお礼をのべてから、家に戻ってきたのだった。

でも、その人と話した内容を鵜呑みにはしていなかったのだ。

パパの給与は低かったので、いつもドイツから電話がかかってきたのだ。ママが、ボクがあまり乳を飲まないことを話したため、ドイツから粉ミルクなどが、よく届くようになったのだ。

それを飲むようになったおかげで、ボクの体重はほんのわずかだったけれども増えていったのだ。でも、生後一ヶ月経っても、ボクの体重は三〇〇グラムしかなかったのだ。ママの献身的な見守りにも拘わらず、ボクの首は四ヶ月過ぎても座らなかったのだ。そこで、ボクが生まれた病院ではなくて、他のクリニックで染色体検査をしてみようとした。パパだった。

それから二週間が過ぎた時だった。パパが職場で働いていると、事務職員がやって来て、「電話ですよ」

と言うと、パパは電話機が置いてあるところに行き、受話器を取ったのだ。

「息子さんの検査結果が出ました」

パパは電話線を通しての声にハツとして、いくらか恐さを覚えながら受話器を強く耳に当て続けていた。

「二十トリスミーのダウン症と判明しました」

それを聴き、気が動転して何かをしやべろうとした。パパだったが、ことばが口から出ないでいた。受話器の向こうで話している声が、耳に入っていないでいたのだった。

少しすると、「そうでしたか。ありがとうございます」と言っ、パパは受話器を置いたのだ。その時、「ありがとうございます」と反射的に自分の口から出たことばが、妙に残り続けていた。パパだった。それと同時に、ボクが生まれた病院では、なぜ教えてくれなかったのだろうかと思ったのだ。

（外国人の妻だったからなのか。でも、それならいずれダウン症だとわかるのに。あとで言おうとしたのだろうか。いや、違うだろう。出産したあと、すぐにわが子を見ることが

できなかったし、それに極端に乳を吸う力がなかった子だったので、担当の医師はこの子の生命力はないと判断したのではないだろうか。だから言わなかったのだろう。そうしか考えられない」

パパは目の前の受話器に目を落とし続けたあと、仕事場に戻ったのだ。体から力が抜けていたパパ。やはりそうだったのかと何度も心のなかでつぶやき、家に戻ったら、ママにどのように伝えたらよいのだろうかと考え続けていた。

勤務時間が終わり、帰宅して玄関で靴を脱ぎ出した。パパに、ママが、「おかえりなさい」といつものように明るい声を出したのだ。

そのあと、六畳の居間に入って来たパパに、ママが言ったのだ。

「今日、母から小包が届いたわ。あなたが戻ってから、紐をほどこうとしたけれど、待ちきれなくて開けてしまったわ。ほら、母が送ってくれた木のおもちゃがあるでしょう。彼は、まだあのようなおもちゃで遊ばないのに。でも、そのうちに関心を示すでしょうね」

畳の上に置いてあったおもちゃを手にとってから、それをママはパパに渡したのだ。そのおもちゃを見ながら、パパは話さなければならぬと自分に言い聞かせ、ママを畳の上に座らせたのだった。

「きみに伝えなければならぬことがある。今日、病院から電話があつて」

そこまで言う前から、パパは黙ったのだ。

ママはパパの目を見続けていた。

「検査の結果、息子は」

そう言う前から、パパはまた黙ったのだ。

少ししてから、

「彼は、ダウン症だとわかった」

とママの目を見つめながら、声を絞って言ったのだ。

それを聴いたママは、一瞬体をギクツと震わせ、ドイツから届いたおもちゃの包装紙に、目を向け出したのだ。

パパは何ということ伝えてしまったのだろうと思ったのだ。ママをさらに正視しなければならぬのに、パパもママと同様に、その包装紙に目を落とし続けたのだ。すこしの間、二人とも黙り続けていた。

しばらくすると、ママが立ち上がり、隣の三畳の寝室で寝ているボクのところに来て、ボクの寝顔に自分の顔を重ねたのだ。ボクは震えるような手と顔を感じた。

目を開けると、二人ともボクをじっと見つめていた。

そのあと、二人は居間に戻り、ママが居間の小さなテーブル上に置かれたキャンドルに、火を灯してから言ったのだ。

「私たちに授かったこの子だわ。それを心に留めながら、暮らしていきましょう」

「もちろんだ。この子をどうしても育てる」

パパは力強い声で応えたのだった。

この日の夜、ボクの家では、キャンドルの明かりがずっと灯り続けていたのだ。

## 第二章 パパの願い

浜松の冬はドイツと較べると明るく暖かかったので、ママはセーターなしで毎日過ごしていた。

そのママは聖隷事業団を創設した人の夫人から借りた竹作りの乳母車にボクを乗せ、毎日のように外に出ていた。パパも休日になると、その乳母車を押して一緒に散歩するようにもなったのだ。

ママは道行く人と出会うと、親しそうに挨拶を交わし、ボクをいつも笑顔で皆に誇らしそうに見せていた。

日本語を話せず、親戚や友人もなく、ボクを今後どのように育ててよいのかとの見通しも立てることができなかったママだったが、明るい性格のママは、少しずつ体重が増えてきたボクの成長を、パパと一緒に喜びながら、浜松の地で暮らしていた。

ただ、残念なことは、パパはボクへの早期治療を直ぐにとは考えていなかったのだ。もし考えていれば、ママが知りたかったいくらかの質問を専門の人に訊くこともできて、ママを安心した気持ちにさせて、毎日過ごすことができただろうに。

パパは、ボクと同じような子供たちが住む施設に勤めていたにも関わらず、そのことをしなかったのだ。それに地域の保健婦さんともコンタクトを持たなかった。もうすこし、ママのことを考えるべきだったのに。

ママは、クリスマスが近づいてくると、近くの林から高さ一メートルほどの木を採って、それを居間に置き、自分で作った麦わら星や月などを枝に吊るしはじめ、十二月二十四日を待っていた。

ドイツのおばあさんからは、木のおもちやが多く入った小包がよく届くようになったのだ。とくに、音のするおもちゃが気に入って、それを手に持ちながら遊ぶようになったボクだった。その様子を見て、パパはボクがよるこんで遊ぶような音のする木のおもちやを作りはじめ、作ってはボクにくれるようになったのだ。

そのようなある日、パパは街の図書館へ行き、一冊の本が目にとまり、それを借りて夢中で読み出したのだ。ママは毎晩、寝る前には聖書をかみかみ読んでいたが、パパはその本と出合ってから、毎晩のように、それを枕元に置いて目を通してから寝るようになったのだ。その本というのは、宗教哲学に関するものだったのだ。

ママは、なぜその本に関心を持ったのかをパパに訊いたのだ。その時、パパは答えたのだった。

「学生時代から、鶴見の総持寺というお寺に座禅を組に行き、そこで寝泊りもしていたこともあった自分だ。そのようなことで、その本の内容が体を通してわたしのなかに入ってくるように感じられ、その著者の教えている大学へ、職場の休日を利用して行くようになったのだよ」

肯いて聴いていたママだった。

それから数カ月してから、パパは考え抜いた末、ママに話し出したのだ。

「浜松から茨城県の土浦市に引っ越そうと考えているのだけど、どうだろう？ 木のおもちや作り、それも知的発達遅滞のある幼児たちのために、おもちゃ作りをしたいのだ。」

それに時間が許せば、再び大学で勉強したいのだ。土浦は故郷のような地でもあるだ。友人もいる。

また近くに筑波大学があつて、そこで池田先生という人がダウン症の早期治療セラピー教室を開いているので、そこに彼を通わせたいのだ」

パパは、土浦が自分にとって、いかに大切な地なのかを、ママにさらに伝えようとしたのだ。

「ダウン症などの人たちと初めて出会ったのは、学生最後の年だったよ。そろそろ就職先を考えはじめていたときだった。

友人に誘われて、ある施設に行き、そこで一週間過ごしたことがあつたのだ。彼らは、初めてのわたしに親しく寄つてきては、何かと話しかけてきたのだ。その振る舞いは明るく、素直で、とても純粋に映つたのだよ。とにかく、彼らと一緒にいるだけで楽しかったのだよ。

それから数週間して再びその施設に行き、園長に、『ぜひ、ここで働かせて下さい』と願いを出して、職員になつたのだ」

パパは、さらに続けたのだ。

「ことばでの会話が乏しい彼らと寝泊りを共にしていると、ますます彼らに魅せられてしまったのだよ。ぜいたくにも、彼らと同じような心境になりたいと思つたほどだった。

その心境というのは、不平・不満を言わず、自分をありのままに出して、自分を守り、防衛しないということ。それに人を疑わないということだったのだよ。そこに、ことばを越えた真実性があると感じたのだつた。とにかく、彼らと接していると、彼らが鏡となつて自分が映し出され、それもエゴイステイックな気持ちを持った自分を見出して、ハッとするときにしばしばあつたのだよ」

一息入れてから、パパはまた話し出したのだ。

「その例の一つとして、手づかみでご飯を食べている子の手をつい軽く叩いてしまったことがあつたのだ。そのときから数日間、自分の手をじつと見つめたよ。その子は素直に食べていたのに、こちらの瞬間的な強い思いで手を打ってしまったことに後悔したね。もうすこし自分を抑え、彼を尊重しながら接しなければならなかつたのに」

パパの話は、さらに続いたのだ。

「その施設には重度の子供も多く、彼らは自ら語りかけることが少ないこともあつて、問いかけるこちら側の真摯な心が大切となつてくるのだよ。

それはまさに自然との出遭いのなかで、自然からはことばとしての語りかけはないが、こちらから話しかけ、問いかけると、それなりの返事を得るのに似ていると思つたのだ。自然も彼らも、まわりと共に懸命に生きているのだから」

ママは、耳を傾け続けていた。

「そのような経験をしているなかで、こんどはダウン症の息子を持ったよね。それはネガティブなことではなく、彼を通して自分や社会を見つめるチャンスでもあるとの考えとなつたのだ。そこから自分の生きる方向性を見つけようと。それには、慣れ親しんだ土浦の地だと、何かと活動がし易いのだ」

「そうなの。わたしには肢体不自由の姉がいて、あなたと出会う数年前に亡くなつてしまつたわ。その姉から、わたしは多くのことを考え、何が大切なのかを知つたわ。そのこと

は、以前あなたに話したことがあったわね」

「ああ、アンネのことだね」

「とにかく、あなたが語った内容、よくわかったわ。あなたがそう望むなら、協力するわ」この地にくらか慣れてきたママだったので、パパの願いを素直に受け入れるのは、そう容易ではなかったに違いない。ママに深く感謝したパパだった。

数カ月したら、ボクたち三人は引越すことになったのだ。

### 第三章 木の手作りおもちゃとボク

ボクたちの住いは街の外れに建っていて、こんどもブリキ屋根の平屋の家なのだ。

ここでも、しゃがんで用を足す汲み取り式の便器だったので、パパは直ちにプラスチックの簡単な洋式タイプを買い、それを取りつけたのだった。

その家から、一歳になったボクは、筑波大学で開かれていたダウン症のための療育教室に通い出し、体の動作訓練などを受けるようになったのだ。

ゆっくりだったが、少しずつ発達していったボクだった。大学生たちとのコンタクトは楽しく、ボクの家を訪れてもくるようになったのだ。

ママは先生と英語で会話を交わし、また大学付近にドイツ人女性が二人住んでいたの、その二人の家にボクを背中におんぶして、時々行くようになったのだ。

パパは木のおもちゃを、友人が働いている土浦市内の施設内で作るようになり、それらを市内のデパートや地域の子供祭りなどで販売することをはじめたのだ。でも、それだけでは生活費が足りなかったの、自分で作ったおもちゃを大きなダンボール箱に詰めて、近くの幼稚園や保育園に行き、売り込む活動もするようになったのだ。

パパが初めて幼稚園へ売りに行った時、ママを園の外で待たせていたのだ。気が弱いパパだったの、ママが一緒だと心強く感じたのだろう。

最初の頃、園の門をなかなか潜れなかったパパだったが、生活費を稼ぐにはこれしかないと思い、意を決して売り廻っていたのだ。二つ、三つ買ってくれと、うれしそうな顔で家に戻ってくるようになった。パパだった。

パパはおもちゃを作るかたわら、火曜日の午前中の二時間だけ、筑波大学の大学院に通い、宗教哲学の三枝先生のゼミを聴講するようになったのだ。時間があると、机に向かっていた。

ママは、生活がいくらか厳しくなっても、何一つ辛いとは口に出さないで、いつも明るく振舞っていた。それと、家の近くにあったプリマハムという会社の社員たち六名にドイツ語を教え、その授業料を生活費にまわすようになったのだ。そのことを、とても感謝していた。パパだった。

そのような日々が続く、ボクが三歳の時だった。ボクたちの生活に、新たな局面が加わったのだ。

パパがおもちゃ作りの仕事を終えて家の玄関戸を開けると、ママの「おかえりなさい」

いつもの明るい声を聴きながら靴を脱ぎ、台所に入って来たのだ。

ママは、ボクを背負いながら包丁で人参を切っていた。そのママの頬にキスをしたあと、パパはママの包丁手さばきをしばらく見ていた。

「日本の包丁に、大分慣れてきたね」

「そうね。この大きな包丁、なんでも切り易く、いいわね」

そう応えながら、人参を切り続けていたママだった。

少しすると、ママが言ったのだ。

「今日二つの電話がかかってきたわ。一つは母からで、もう一つはテレビ局からだったわ」  
「テレビ局？」

「ええ、内容をすこし話してくれたのだけれど、わたしにはよくわからなかったわ。でも、明日の朝、もう一度電話をかけるそうよ」

済まなそうな声のママだった。

日本語がまだよく話せず、受話器では相手の姿も見えず、話も聴き取りにくいと、ママはパパによく言っていた。電話に出るのが好きでないと伝えていた。ボクが産まれてから、ボクを育てるのに精一杯で、ママは日本語を習う時間がなかったのだ。それでも、まわりの人たちと接するうちに、日常会話はどうかできるようにはなっていた。でも、十分ではなかったのだ。

翌朝、パパがいつものように作業所へ行こうとすると、家の電話ベルが鳴ったので、パパが受話器を取りつたのだ。

電話での話を終えてから、パパがママに言ったのだ。

「NHKのテレビ局からの知らせで、私たちが開設しているトイライブラリーを取材したいとの申し込みだったね。思いも寄らない話だったので、明日返事をしますと応えたよ」  
その日の晩、パパとママは話し合っていた。

「どうしよう、ぼくはマスコミが好きではないのだ。断ろうか」

「でも、あなたが開いているトイライブラリーは、商売でしているわけではないし、発達に支障をきたらしている幼児を持つ親たちが集まって、できたのだし。それと、あなたがいつも言っているように、この活動がここだけでなく、日本の至るところにできてくればと願っているのでは？」

「そうだが。しかし、どのように放映されるか」

「では、あなたの希望をそのテレビ局の人に話してみたら？」

「そうだな」

そう返事をしてから、パパはしばらく考え続けていた。

「よし、承諾しよう。さらによい活動となるように。しかし、もっと忙しくなるかもしれないぞ」

「わたしで、できることはするわ」

トイライブラリー活動にとっても協力的なママだった。

翌日、NHKから電話がかかってきて、自分の希望を伝えたあと、パパは承諾したのだった。

そのあと、パパは頭のなかで、ここに至るまでのトイライブラリーの活動を思い起こしていたのだ。

（知的発達遅滞のある幼児は、市販されている一般の玩具ではなかなか遊ぼうとはしないでも、音のするおもちゃには関心を示し、遊ぼうとする。息子もそうだった。そこで、音のする木のいろいろなおもちゃを作っては、彼に与えるようになったのだ。

その作ったおもちゃで、家の三畳間は、足の踏むところもないほどとなってしまったのだ。そのことを知った近所に住む幼児たちの親たちが家に来るようになり、おもちゃを借りていくようになったのだ。

そのようなことをしているうちに、おもちゃを借りに来る親子が次第に増えて、家では十分な対応ができなくなってしまったのだ。そこで、土浦市内の古い木造アパートの一室を借りて、毎週の土・日曜日をおもちゃの貸出日として、無料で提供することをはじめたのだ。

生活費が足りないのに、アパートの一室の家賃を払い、そのようなことをするには勇気がいった。でも、共通する悩みを持つ親たちと付き合っていると、お互い共感するのを覚え、どうしてもトイライブラリーを開こうと決心したのだ。

開設当初は、妻と二人で訪れてくる幼児と親に應對していたが、そのことが地域の新聞に載り、訪れてくる親子の数が少しずつ増え、彼女との二人だけでは十分に対応ができなくなってしまったのだ。さいわいなことに、近くの筑波大学で福祉を専門に学んでいた大学院生数名が、手伝いに来るようになったのだ。

手作りの木のおもちゃを貸し出していたので、数を増やさねばならなかったが、これもうれしいことに、近くに住む主婦グループの人たちがおもちゃ作りに参加してくれるようになったのだ。

学生たちも主婦たちも、皆ボランティアだった。私たちはお互いに助け合いながら、トイライブラリーの活動をするようになっていったのだ。

息子だけでなく、他の幼児たちがおもちゃであそぶ姿を目にするたびに、よろこびを感じた自分だ。それに新たに作ったいろいろな種類のおもちゃを、妻はかならずほめてくれた。その声に押され、他の幼児にも薦めることができたのだ。

土浦トイライブラリーが放映されたのは、多くの人が観る朝の時間帯だったのだ。十分間の放映後、関東地区にはトイライブラリーがほとんどなかったのだ。毎日数十件の問い合わせの電話が家にかかってきたのだった。それに応じなければならなかったママは、不自由な日本語、それも電話での対応だったので苦労していた。

トイライブラリーに来る家族は、増え続け、県外からも訪れてくるようにもなり、それにマスコミなどの取材も多くあったのだ。

この活動が関東地区、それに全国にまで広がっていくことを願いながら、パパとママは活動していた。

そのようなある日、安田火災保険会社が、トイライブラリーに援助金五十万円出した。パパはとてもよろこび、それで市販の木のおもちゃを購入して数を増やしたり、手づくりのおもちゃのカタログを作成したりしていた。

## 第四章 九さんと遊ぶボクたち

パパがトイライブラリーを開いてから、二年が過ぎた時だった。ボクはいつものようにママの自転車の前部に座って、街の繁華街にあるトイライブラリーへ向かったのだ。

家から十分ほどで、木造づくりの古いアパートの一室着き、ママがドアを開けると、いつもとは違う明るさにびっくりした。

一人歩きがまだできなかったボクは、パパに抱かれたまま、真っ白いシャツに紺のズボンをはいた人の前にいくと、パパがその人に、

「息子です」

と、言ったのだ。と、顔にニキビの痕がいくつも残っているその人が、「こんにちは」とボクを見ながらにつこりしたのだった。

ボクが、「アー、アー」と声を上げると、その人は笑顔でボクを抱いたので、ボクは挨拶の代わりに、再び「アー、アー」と声を出したのだ。

そのあと、畳の上に敷かれた絨毯の上で、ママたちと一緒にいつものようにおもちゃで遊びはじめたボクだった。

その人は、おもちゃで遊んでいるボクたちを見ながら、パパに言ったのだ。

「このような情景はいいな」

「ええ、おもちゃを媒介にして、親は子供と遊び、会話もできますので。それにここにある木のおもちゃは、子供たちの発達を助長するように作られてもいます。そのほとんどが手作りです」

パパはそう伝えてから、その人に説明しはじめたのだ。

「発達に支障をきたしている幼児たちは、家からなかなか出られないのです。でも、このようなところで、同じ悩みを持つ親がお互いに会話をしたりするなかで励まされたり、不安なども軽減され、悩みが希望にかわっていくのです。親、とくに、お母さん方が元気になるのです。連帯意識は大切なのです」

パパはさらに続けたのだ。

「ここに来るには、父親が車で運転して、父親も養育の役割を知っていくのです。彼らを育てるのは、母親だけでは無理です。母親にもストレスが溜まります。それを和らげるためにも、父親及び地域の人たちの協力が必要です。このトイライブラリーは、そのようなことを考慮に入れながら、家族と共に生きる社会を目指しているのです」

それを聴いたその人は、ボクたちが遊んでいる輪のなかに入ってきたのだ。そうすると、照明が一段と明るくなり、カメラの回る音がより高くなっていたのだ。

トイライブラリーに、その人は三時間ほどいてから、帰り際、優しい顔でパパとママ、それにボクを見ながら、

「このような活動が全国に広がって行くといいなあ」

と言い、そのあと、パパに、

「何か書くものはありますか」

と、訊いたのだ。それを聴いたママは、一枚の紙とペンをその人に渡すと、その人は、



どの花にも

草にも

どのおもちゃにも

ひとつのいのち

坂本 九

と、書いたのだ。

それを読んだパパは、その人がどのような花にも草にもおもちゃにも、それぞれの命の輝きを見つめているのを知ったのだ。

パパは感動して、「ありがとうございます」とその人の瞳を見ながら声を出し、手を強く握ると、その人がにこやかな顔で言ったのだ。

「わたしの祖母は茨城に住んでいるのですよ。また、このライブラリーに来るよ」

それからというものの、ママは、その人が歌っていた『幸せなら手をたたこう』をしばしば口ずさむようになったのだ。

その歌を耳にすると、笑顔になるボクだった。

## 第五章 青い瞳のおばあさん

ボクが四歳半を過ぎた時だった。ドイツに住んでいるママのお母さんが、ボクたちの家を訪れてくることになったのだ。ママは、「台風の季節に、日本に来るなんて」と言いながらも、にこにこしながらその日を待っていた。

パパの車が家の前で止まるのを聞いたママは、直ぐに立ち上がって玄関先へ向ったのだ。そのあと、ママたちが居間に入ってきたのだった。

畳の上で寝転びながら、パパが作った木のおもちゃを手にして遊んでいたボクを、パパが抱き上げて、

「ここにいる人が、きみのおばあさんだよ」

と言うと、まだ会ったこともない青い瞳の人がボクの顔を見続けていた。

「アー、アー」と声を出すボク。と、おばあさんはボクを抱き上げてから、

「とても、柔らかい体だね」

と、ママに言ったのだ。その時、家の外からスピーカーを通して、ママがよく口ずさんでいた『こんにちは、赤ちゃん』の歌が流れはじめたのだ。それを聞いたおばあさんがママに、

「あのメロディーは、何なの？」

と、訊いたのだ。

「あれは果物や野菜、それに牛乳などを車に積んで売っている人が来たことを知らせるメロディーなのよ。新鮮な食べ物があって、わたしも時々買ったりしているわ」

おばあさんはコートも脱がずに、ボクを抱き続けながら、ママが話すことに耳を傾けて

いた。

少しすると、おばあさんは居間の簡易ソファに腰かけ、コーヒーを飲みながら、飛行機内で起こったことや、ママの二人の兄家族のことを語りはじめたのだ。

一時間もすると、欠伸をするようになったおばあさん。それを見たパパがおばあさんに、「疲れていませんか」と、訊いたのだ。

「ええ、そうですね」

「時差の違いもあるし、すこし休んだほうがいいですよ。お義母さんはいつも昼寝を欠かさずにしていたし、機内ではそれでもできなかったでしょうから」

「それでは、そうさせてもらおうかしら」

パパが押し入れから蒲団を取り出して、それを畳の上に敷きはじめると、おばあさんが低い声で隣にいたママにささやいたのだ。

「寝るといっても、この部屋で横になるの？」

「ええ、そうよ。そこに四枚の襖があるでしょ。それで仕切るから、向こうが寝室となつて、こちらが居間になるのよ」

ママはさらに続けたのだ。

「食事のときは、この居間がこんどはダイニングルームにもなるのよ。そればかりではなく、ここが教室にもなるのよ。今、近くのプリマハム会社の社員六名に、ドイツ語を週に一回教えているわ。彼らがここに来て、ドイツ語会話の時間となるのよ」

おばあさんは驚いた様子も見せずに、ママが語ることに耳を傾け続け、二日間ママとお絶えず話をしていた。

三日目の夕方から、強い風が吹き出し、強い風と雨で、ボクの家之窗がガタガタと音を立てて揺れ出して、窓の隙間から水と風が部屋に漏れはじめたのだ。と、パパは急いでトタン製の雨戸を閉めたのだが、どこからか水と風が侵入してくるのだった。

しかし、おばあさんは心配そうな表情を見せずに、夜が更けるまでママと話しを続けていた。

翌日ボクはベビーカーに乘せられ、ママとおばあさんと一緒に、三ヶ月前から通いはじめた地域の幼稚園へ向ったのだ。その聖母幼稚園はイギリスの牧師が運営していたので、ママはその人と英語で話をしていた。

やっとひとり歩きができるようにはなっていたボクだったが、排便はまだ一人ではできずに、保育士たちを悩ませていたのだ。

家のなかではドイツ語、外では日本語の日々だったので、ボクは頭のなかは混乱していた。まして、筑波大学の先生が、パパとママに、「ダウン症のなかでも重たいほうで、動きが多いですね」と言ったことがあった。

無断で幼稚園の門から出たことが何回もあったボク。その度に保育士さんたちを困らせてしまったのだ。

でも、ボク自身、ママの自転車の前座席に乗って幼稚園へ行き、皆と一緒にいるのが楽しく、ママもお母さん同士でよく話をして楽しそうだった。ボクの誕生日には、園の仲間とお母さんたちを家に呼んだりもしていたママだった。

その幼稚園へ、ボクはおばあさんと一緒に毎日通ったのだ。おばあさんはいつもここに

こして、うれしそうな顔をしていた。

ママが、「母は、親戚の人からリンゴのおばさんと呼ばれていたわ」とパパに話したことがあったのだ。笑うと頬が赤くなるおばあさん。ボクの頬が赤いのは、おばあさんに似たのに違いない。

パパが、そのおばあさんに、「どこかへ行きましょうか」と訊くと、「娘と孫と家にいるのが一番いいわ」と静かに答えたおばあさんだった。

日本を発つ前日、これから寒くなるからと言って、おばあさんはママに自分の二枚のセーターを手渡し、ボクには一カ月の滞在中に編んだ毛糸の靴下をテーブルの上に置いたのだ。

一日に何回もおばあさんの温かい胸に抱かれていたボクだった。

## 第六章 もう一人のおばあさん

青い瞳のおばあさんがドイツに帰ってから、パパはさらにおもちゃ作りに精を出していた。おもちゃの注文は全国からくるようになり、それに追われていた。パパだった。そのおかげで、ボクたち家族は経済的に余裕も出てきて、時々外食もできるようにもなったのだ。そのようなある日、リュウマチとパーキンソン病に患って、自分一人では歩けない状態のパパのお母さんが、ボクたちの住まいに四週間の予定で遊びに来ることになったのだ。ボクたちはよろこんでおばあさんを迎え、楽しい時を過ごす日々となっていたのだ。そのおばあさんが東京の家に戻る一週間前、パパに語ったのだ。

「よかったら、あなたたちと一緒に暮らしたいのだけれど」

それを聴いたパパは、直ぐに返事をしなかった。というのも、ボクがいるからで、さらにママに負担がかかると思ったからだ。

その夜、パパがおばあさんの願いをママに伝えると、躊躇もなく、「いいわよ」と返事をしたママだった。

そこで、そのおばあさんと一緒に暮らすことになったボクたち。おじいさんはすでに二年前亡くなっていなかった。

おばあさんがボクたちの住いに遊びに来る前、ママがパパに訊いたことがあった。

「あなたのお母さんは、どんな人なの？。知りたいわ」

その時、パパはママに話したのだ。

「母は多くを語らず、大変苦労した人だったね。自分の少年時代は、父が不在だったので、母は私たち子供四人を育てるために、朝から夜遅くまで着物の仕立てをしていたよ。

学校から戻ると、母はいつも四畳半の居間兼仕事場で、長い裁縫台を前に座っていたね。わたしの『ただいま』の声を聴くと、母はすこし顔を上げて、『おかえり』と優しい声で返事をし、手を休めずに着物を縫い続けていたよ。私たち子供たちが布団に入ってから、隣の四畳半部屋には、ずっと明かりが灯っていたね。

私たちが起きる頃は、隣で寝ていた母の姿はなかったのを覚えているよ。台所のトント

ンという音でいつも目が覚めたね。

私たちが子供を育てるのが、生き甲斐と語った母だったよ」

パパはさらに続けたのだ。

「裁縫を毎日していたせいで、指が変形してリュウマチに悩まされてしまった母だったよ」

「そうだったの」

ママは、パパの語る話に耳を傾き続けていた。

そのおばあさんと暮らすようになってからは、ボクたちは今よりもやや広い住宅に引っ越しすることになったのだ。

おばあさんは、自分一人では歩けなかったので、ママはおばあさんを車椅子に寄せ、ボクが幼稚園にいる午前中は、毎日のように外に散歩に出かけていた。

近くに住む主婦たちが、

「お宅の奥さんえらいですね。感心するわ」

と言ったのを、パパは何度も耳にしたのだ。それにおばあさんを連れて週に一回ほど通う国立霞ヶ浦病院の婦長さんも、「親孝行のお嫁さんね」と褒めたのだった。

それを聴く度に、ママに感謝していた。パパだった。とくに、頭を下げていたのは、夏の暑い日には三日に一回の割で、ママが体重三十六キロになってしまった寝たきりのおばあさんを抱きかかえ、一緒にお風呂に入っていたことだ。おばあさんを親身になって尽くしていたママだった。

またおばあさんから、ママはお赤飯の作り方や魚の焼き方を、「おかあさん、おかあさん」と言いながら教わったりもしていた。

仕事から戻ると、先ずベッドで横になっているおばあさんの部屋に行く。パパ。そのあと、ボクとママが部屋に入り、四人で今日何が起こったかを話したり、テレビを一緒に観たりの日々が続いたのだ。

パパは、ママがいつもにこにこしながらおばあさんと接しているのを目にするたびに、深く感謝していた。おばあさんはボクを見ると、いつもにこりしてくれた。

そのおばあさん、身体が日ごとに衰えてしまい、特別養護老人ホームに入ってしまったのだ。ママは、そこへ毎日通っていた。

ちょうどその頃、ボクは土浦特別支援学校に通いはじめたのだった。

ある日、夕食を終えた。パパが、居間でお茶を飲みながら新聞を読んでいると、ママが寄ってきて、パパにドイツのおばあさんからの手紙を見せたのだ。

そこには、おばあさんの住んでいる五階建ての家の三階が数カ月したら空くので、遠回しにボクたち三人が、そこに住んではどうかと書かれてあったのだ。それを読み終えた。パパが、ママに訊いたのだ。

「お義母さんは、体が弱ってきたのだろうか」

「そんなことないと思うわ。ただ、その手紙に書いてある通り、三階に住んでいる家族が引越しをするそうなの」

ママはいつもとは違う低い声で答え、そのあと言ったのだ。

「この手紙を一週間前に受け取ってから、彼のことを考え続けたわ。このままここで教育を受けさせていてよいのかと。そうすると、肯定的な答えがわたしのなかで見つからないの」

ゆっくりと自分にも言い聞かせるように語ったママだった。

それを聴いたパパは、驚いたのだ。というのも、今やつとこの土浦の地でそれなりに生活ができるようになり、これから本格的に、おもちゃの製作活動に取りかかろうとしていた矢先だったからだ。それと、今ボクが通うようになった特別支援学校を卒業するまでに、それなりの作業所を開こうと思っていたからでもあったからだ。

ママの顔をしばらく見つめていたパパだった。

少ししてから、パパが言ったのだ。

「このことはよく考えてから、お互いよく話し合ってから決めよう」

それから数日間、パパはママのことを考え続けていたのだ。

(よくよく考えた末、妻は言ったのだ。今まで不満やグチをなにひとつ口に出さず、よくやってきた彼女だ。もう限界なのかも知れない。ダウン症候群のなかでも重度のほうに入る息子を異国の地で八年間育て、わたしの病身の母を二年間介護し、経済的困窮をしいたげたのだ。

また筑波大学近くに住んでいたドイツ人夫人から、

『あなたは息子を連れて、ドイツに戻ったほうがいいのではないの?』

と、忠告されたこともあったのだ。そのときでも、彼女は、

『夫と共に暮らしていくわ』

と、応えてくれたのだ)

パパは、さらに想い起こしていたのだ。

(義母が住んでいる家の三階が空くということは、何かの縁があつてのことかもしれない。息子を中心にして動いている私たち家族だ。彼が活動し易いようにしなければならぬ。ここ土浦での本格的な作業所作りはできなくなるが、ドイツにいても福祉的な活動はできるだろう。

トイライブラリーも軌道に乗りつつある。自分がいなくても大丈夫だろうし、全国に広がっていくだろう。何よりも、浜松でわたしの願いを反対もしないで、素直に受け入れてくれた彼女だ。その彼女の願いだ。ホームにいる母のことが気になるが、これは時に任せ

て)

そのあと、パパとママはしばしば語り合っていた。

ある日、パパとママが、また話し合っていた。

「向こうで暮らしはじめたら、月々の生活費をどのようにしていいのかを考えたりするよ。自分はドイツで通用する資格はないからね。家賃も払わなければならないし」

「そうね」

「ただ、行くとなったら、やってみたいことがあるのだ。ドイツの福祉事情を書いて、自分が知っている人たちや友人たちに定期的に発行したいのだ。それと、福祉関係の人が日本から来たら、その方面の関連施設など通訳を兼ねて案内したいのだ。日本とドイツの架け橋的なことをやってみたいな」

「それは、いい案ではないかしら」

「ただ、それで生活費が捻出できるかどうか」  
「ドイツはわたしが生まれた地だし、自分も働くわ。心配しないでいいわよ。私たちは協力して、彼を育てていきましょう」

パパは黙っていた。そのパパに、ママが言ったのだ。

「私たちがドイツのテュービンゲンに引っ越したら、直ぐに彼を街の特別支援学校に入れるわ。今から学校当局と連絡をしておくから」

肯いたパパだった。

それから出発までの半年間、ママは生き生きしていた。その姿を見て、何かがはじまるだろうと思ったボクだった。

## 第七章 ボクたちの新たな生活

こんどの住いは、街の中心地に建っている五階建ての大きな石造りの家なのだ。ママがボクに、「四百五十年前に造られた家よ」と教えてくれた。

二階には、おばあさんが一人で暮らし、ボクたち三人は三階だ。

この街で暮らすようになって四日目だった。市郊外にある特別支援学校へ、小さなマイクロバスで通うようになったボク。

その学校に通い出して三ヶ月が過ぎた時、ママがパパに言ったのだ。

「こんどは、わたしが仕事をするわ。ちょうど今、テュービンゲン駅の駅ミッシヨンの職場に一つの空きがあるので、そこで働こうと思っているわ」

「駅ミッシヨン？」

「ええ、テュービンゲン駅構内で助けを必要としている高齢者や体の不自由な人たちに手を貸したり、時にはカバンを持ってあげたりするのよ。その他にも、ホームレスの人やお腹を空かしている人に、駅内にあるミッシヨン室でスープやコーヒーなどを出したりするわ。とにかく、駅構内にいる困った人たちを援助、世話するのが務めなのよ」

「人の助けを自ら進んでするその仕事、きみに合った職場のような気がするね。ということ、わたしが家の炊事と家事、それに子供の世話をする主夫となるな」

「よろしくたのむわ。もちろん、わたしも母も協力するから」

「わかった。やってみるよ」

家事とボクの世話をするようになったパパだった。と同時に、時間を見つけては、ドイツの福祉に関するミニ情報誌を作って、日本の友人や知人たちに定期的に送る活動をするようにもなったのだ。

それと、日本から福祉関係の人たちが来ると、その関係の施設や高齢者ホームを案内するようにもなったのだ。

主夫をやり出した最初の頃、それに意味を見出していなかったパパだったが、おばあさんと一緒に暮すうちに、主夫の存在に意味を見出していったのだ。

毎日の料理や洗濯や子育てをしながら、ゴミや食べ物や健康などの問題点を知り、主夫

の活動は、人間が生きていくうえで最も基本的でかつ重要なことに気づき、それが社会及び地域と結びついているのを発見したパパだった。そのようなことで、パパは主夫の活動を一層深めようとしていたのだ。

人を妬んだり、人と競争したり、人と比較したりすることが嫌いなパパだ。家族一人ひとりが穏やかに、共に暮らそうとする役割を担う主夫の活動に、よろこびを見出すようになっていったのだ。そのようなパパがいつも傍にいたので、ボクはうれしい。

学校から家に帰ると、先ずおばあさんの部屋に行き、テーブルの上に置いてあるジャム入りのパンを食べるボク。これがとても美味しく、にこにこ顔になるボクだった。

ボクが小さい頃、おばあさんはボクに会うために、ドイツから日本にやって来たことがあったのだ。当時のことは、ボクはまったく憶えていない。でも、直ぐにおばあさんと仲良くなったのだ。

おばあさんには、ママの他にもう一人の娘がいた。その人は、車椅子で移動をしていたと、ママがパパに話したことを聴いたことがあった。その時、ママがパパに、

「母は、三十七年間、体に不自由を抱えた姉をよく見ていたわ」

と、言ったのだ。その伯母さん、ボクが生まれる三年前に亡くなってしまったのだ。

体の不自由な娘を持ったおばあさんは、その経験からか、ボクを直ぐに受け入れてくれて、ボクとゲームをしたり、ボール投げをしたりして、よく遊んでくれるのだ。

ボクと遊ぶには、かなり忍耐と寛容が必要なのだが、決して怒ったりはせずに、常ににこにこしているおばあさん。そのおばあさんの顔を見ると、いつもホッとして、笑顔になるボクだった。

ママは仕事場へ、ボクは学校へ、そうすると、パパは家で料理を作り、おばあさんと一緒にいつも昼食を摂るのだ。昼食に限らず、夕食も作るパパだ。

お皿に盛ったものはかならずきれいに食べるおばあさん。パパの料理は醤油味となるが、すべてを食べるおばあさん。今までおばあさんがお皿に残したのを見たことがない。

夕食したあとは、おばあさんと一緒にテレビを観たり、ゲームをしたりして過ごすボクたち。それも終わり、階下の自分の部屋へ戻る時は、おばあさんはパパにかならず、

「ありがとう」

と声をかけ、ボクにも笑顔で、

「よく眠りなさい。また、明日ね」

おばあさんのお父さんも牧師だった。その職は忙しく、家には常にお手伝いさんがいたようで、おばあさんは食事の仕度をしなかったとママが言ったことがあった。そのようなことで、ボクはおばあさんの料理をあまり口にしたことがない。

そのおばあさん、自分の衣類は自分の手で洗い、ボクたちの洗濯物を中庭に干してくれて、そればかりでなく、パパのワイシャツやボクのズボンなども、アイロンをかけるのだ。そのきれいに仕上がった服を着ると、パパはいつも心までも温かくなるとママに伝えていた。

そのおばあさんに心配をかけさせてしまうことがあるボクなのだ。それは、ボクが街のなかで時々迷子になるからだ。

警察のお世話になったことも三回ほどあったのだ。衝動的にボクの体は動き、ママやパパから離れてしまい、一人でバスに乗ってしまうボクだった。

ある日、再び迷子になってしまい、八時間以上もおばあさんやパパやママに心配をかけさせてしまったことがあった。

パパとママが警察署に来て、そのあと、三人で家に戻ったのだ。

ボクが居間に入ると、おばあさんがいたので、大きな声で、

「おばあさん、おばあさん」

と言いながら駆け寄ると、おばあさんはボクを抱きながら、

「どこにいたの？」

と、優しい声で言ったのだ。おばあさんの胸に顔を当て続けたボクだった。

少しすると、おばあさんがママとパパとボクの顔を見ながら、

「みんな、お腹が空いたでしょう。今日は、わたしが夕食の支度をしましたよ」

と、声を出してキッチンへ向ったのだ。居間のテーブルには、おばあさんが用意したお皿がすでに並べられてあった。

ジャガイモスープの鍋を持って、おばあさんが居間に入ってきたのを見た時、今までのはすっかり忘れてしまい、笑顔になったボクだった。

湯気が昇っているスープとパンを前にしての夕食となったのだ。

ママがパンを食べながら、パパに言ったのだ。

「彼が買ってきた今日のパンは、何か特別な味がするわね」

「苦かったり、甘かったり、複雑な味だね」

スープを飲んでいるボクを見ながら、おばあさんがパパに、

「これを飲み終えたら、明日は新たな一日のはじまりとなりますね」

と言うと、肯いたパパだった。ボクたちは、「オイシイ、おいしい」と声を出しながらスープを飲み続けたのだ。

おばあさんというと、いつも心楽しくなるボクだった。クリスマスの時もそうなのだ。夕食を摂ったあと、ボクとパパが飾りつけをした高さ二メートル近くの櫛の木に立つ七本のキャンドルに、パパが明かりを灯すと、ボクはもう何をするのかを知っているの、賛美歌集を本棚から取り出してパパに渡すのだ。

そのあと、皆で一緒に歌を唄う。パパは音痴なので、ママの声に併せ、ボクは口を開け、「アーアー」と声を出す。おばあさんの声はママに似てきれいで、キャンドルの炎が揺れるのだ。

ボクの横に座っているおばあさんを見ると、いつもよりもほっぺが赤く、いかにもうれしそうな顔なのだ。そうすると、ボクの心はウキウキとなって、さらに楽しくなって、自然と笑顔になってくるのだ。

また、ボクのおばあさんは優しいのだ。おばあさんと昼食を摂っていると、開けっ放しにしていた窓から、蜂がボクのリンゴジュースのコップに入り、コップから出られずにいたことがあった。ボクがおびえた目でそれを見てみると、その蜂を自分の両手で包み、窓から放したおばあさんだった。

パパが、「刺されませんか」と訊くと、「今まで刺されたことはありませんよ」とにっこりした顔で答えたおばあさんだった。優しいボクのおばあさん。



そのおばあさんの前でボクの育て方で、パパとママが口喧嘩したことがあったのだ。パパもママも思っていることは、口に出して言うほうだから、かなり激しくなったのだ。

争いごとを見るのが一番いやなボク。まして、ボクの前でパパとママが言い争うのは最も嫌なのだ。その時、おばあさんがやわらかいことばを二人にかけて静まり、ホッとしたボクだった。

なにしろ、感受性が強いボクなので、パパとママの気持ちを汲んだりすると、頭のなかで混乱してしまい、不安になって、心が意固地となってしまうのだ。

ことばで自分の意志を表現できないボク。そのようなボクの傍に、おばあさんがいてくれてうれしい。

## 第八章 地域の一員となったボク

ボクが特別支援学校に通い出して、一年が過ぎた時だった。パパがママに話したのだ。

「彼のクラスには、年齢が異なる子供が三人いて、学習能力の差がかなりあるね。だからだろうな、彼らはいつも一緒になって授業を受けてないよね。

たとえば、読み書きでも、まだその段階に達していない子は下のクラスに参加したり、それに言語治療士が一对一で発音訓練を指導したりしているね。

また、とくにできる子は上のクラスにいたりして、その子に応じた授業を受けているね。ドイツの特別支援学校のやり方なのだろうな。

日本でも一人ひとりの子供の学習能力や、生来の素質に応じた学習ができるように、プログラムがつくられているが、それらは主に集団のなかの力動性によって教育される面が強いと思うのだ。

しかし、こちらでは、それぞれの子供の能力に応じて個別的に学習が行われる場合が多いね。授業も幅広い多様性のなかでされているし、一人ひとりの個を尊重した教育をしているからだろうな」

パパはさらに続けたのだ。

「ミヒヤエルが通っている支援学校の先生も地域学校の先生のように、週二十八時間の労働だし、土曜と日曜以外に週一日休みが取れるので、ゆったりと教えているように見えるよ」

ママは肯きながら、パパが話すことに耳を傾けていた。二人とも、ボクが通っている学校に満足しているようだった。

日本にいた時、ボクを地域幼稚園へ行かせた経験があったパパとママ。ボクがこちらの学校に通い出してしばらくしてから、担当の先生に、地域学校にもボクを週に一、二回通わせたいと希望を伝えていたのだ。

そのようなことがあって、ボクが通っていた学校と地域学校の先生二人とが話し合い、ボクはクラスの仲間一人と一緒に週二回ほど、午前中の授業に二年間通うことになった。そのことを、パパとママはとてもよろこんでいた。二人とも実現可能は難しいと思っていた

たからだった。それというのも、ボクが住んでいる州では、統合教育をまったく行われていなかったからだ。

地域学校の父兄会に、ママとパパも招かれた時だった。パパが集まった親たちの前で語ったのだ。

「どんな子供でも、お互い一緒に遊び学ぶことは現在だけでなく、将来も意義があることです。今後、この州の学校当局がどのような判断を下していくのかわかりませんが、ぜひ統合教育を進めてほしいのです。」

ただ、残念なのは、週二日の午前中だけで、果たして真の交流ができるでしょうか。先生方も中途半端でやりづらいのではないのでしょうか。二年間で終えるのはさびしいことですが、その期間、息子は地域に住む子供たちと知り合いになり、今後お互い関係を持てることが、親としてはうれしいのです。

通りで息子に会ったら、ぜひ声をかけてやってください。一人ひとりを大切に、そして息子たちが居心地のよいところとなるような多様性のある社会を、私たち親は望んでいるのです」

大勢の人の前で、ドイツ語で語るのを苦手としていたパパだったが、ボクのことになると勇気が出るのだ。そのあと、ママも同じようなことを話したのだ。

この地域学校で、ある時のことだった。パパとママが作った混ぜご飯を、皆と一緒に食べていたボク。そのボクが箸でご飯をすくっていると、まわりの仲間も真似して箸を使うと試みたが、難しいのか、皆フォークで食べ出したのだ。

それを見たボクは、皆と同じようにフォークを持って、ご飯を口に入れたのだ。皆に合わせたボクだった。

地域学校に週二回通っていた時だった。街の図書館で布の絵本展を、ママとパパが開こうとしたのだ。

ボクが日本に住んでいた時、布の絵本を作っている横浜の布のグループとコンタクトがあったパパ。そのようなことで、ボクがドイツに住んで二年経った頃、そのグループの人たちが三十種類以上の布の絵本を送ってきたことがあった。それで、遊ぶようになったボクだった。

その絵本を、ママは街の子供たちにも見せようとしたのだ。また日本にいた時に集めた、二百冊以上の絵本も一緒に展示しようとしたのだった。

二ヶ月の間、街に住む多くの子供たちと、その親たちが見学に訪れていた。ボクが地域学校で知り合った子供たちも来て、一緒になって布の絵本で遊んだのだ。

この国には、布の絵本はなく、皆驚きの声を上げていた。絵本に書かれた日本語は、ママがドイツ語に訳してあったので、わかり易かったに違いない。

このような機会を通して、ボクは学校での時間だけではなく、それ以外でも近所の子供たちと知り合いになって、この街の住民となっていたのだ。日本のお母さんたちが作った、この布の絵本に誇りを感じたボクだった。

またボクが住んでいる街では、夏休みの期間、六歳から十五歳までの子供たち四百名が、前期と後期の三週間、毎朝八時半から夕方六時半まで、一グループ二十名前後で近くの森のなかで泥んこになって遊ぶプログラムがあつて、ボクも、もちろんそれに参加して、地域の子供たちと一緒に遊ぶようになったのだ。

そのようなことをしていると、近くに住んでいる彼らと通りで会うと、ボクたちはお互い挨拶をするようにもなったのだ。これが、ボクにはとてもうれしかった。ボクもここで暮らしているのだから。また知り合った彼らもボクの家に来て、一緒に遊んだり、食事をしたりするようになったのだ。

そのようなことをしていると、今まで週二日通っていた学校の通学が、二年間だけではなく、さらに一年間の延長となったのだ。パパとママは、そのことをとてもよろこんでいた。もちろん、ボクもだ。それに学校だけではなく、街の行政も動き出したのだ。

街に住むボクたち仲間五十名と、市長と数名の市議員との話し合いが、ある日もたれたのだ。その話し合いの数日前、ママがパパに話したのだ。

「テュービンゲンの市会議員は六十四名で、そのうち女性は三分の一。それにほとんどの議員は何らかの職業を持っているわ。学校の先生とか弁護士とか医者とか。とにかく彼らには、議員としての給料が無いのよ」

「給料がない？」

「そうよ。でも、週に一回開かれる市議会と、各種専門委員会に出ると、手当として四千元を得るけれど。ただ、市長は給料をもらっているわ」

「それは驚きだな。まさに市民による市民のための政治だな」

「パパは、ママの話すことに耳を傾けていた。」

ボクはパパとママに連れられて、マルクト広場前に建っている十五世紀に造られた大きな市庁舎へ行き、その大会議室に入ると、五十名近くの仲間たちが座っていた。

少しすると、ボクたち仲間の一人が立ち上がり、前もってノートに書いた文をゆつくりと読み出したのだ。

「街の真ん中に、僕たちのようなものも、またそうでもない人も常に出会えるようなカフェー店を設けてほしい。街がその店の家賃を払い、残りの費用は僕たちが払い、その店を運営したい」

それを聴いた福祉事務おだ所の所長が、立ち上がり、

「そのようなカフェー店は隣の街にもあって、多くの出会いの場ともなっているし、テュービンゲンでもそのようなカフェー店をつくるように努めます」

続いて、ボクよりも十歳くらい上の女の人が、マイクの前で、はっきりした声を出して、自分で書いた文を読み上げたのだ。

「わたしには友人が一人いません。たまには街へ出て、レストランにも行きたい。テレビばかりでは退屈なのです。両親は年をとってきているので、一緒に街へは行かれませんが時々兄とは散歩しますが。そうすると、道行く人は、わたしをじっと見つめます。歩き方がおかしいから。まわりの人におかしな者とみられたりするくらいなら、家にいたほうがいいのかも。それでも、街へ出たいのです。そのようなわたしに、だれか付き添ってくれる人がいるとうれしいのです。そのような人が出てくるのを待っているのです。市長は、わたしたちのような人も正常人であると、すべての人に言ってほしいのです」

市長が立ち上がり、

「街にはいろいろな人が住んでいます。もしそうでなかったら、街は退屈になってしまいます。もちろん、ここにいる皆さんも街に所属しています。私が正常で、皆さんが正常でないのだれが言えますか。私が正常でないとやるかもしれない」

こんどは、二十歳くらいの人がしゃべり出したのだ。

「今、付き合っている彼と結婚したいの。この市庁舎の戸籍室で結婚できますか。もし結婚したら、だれも私たちを離すことはできないわ」

市長が、再び立ち上がり、

「結婚するには、経済的なことも考えねばならないでしょう。経済的なことを考えた上で必要な書類を揃え、戸籍係に提出してみたらどうですか」

次に、ボクよりも二十歳以上も年上の人が話をはじめたのだ。

「僕は夕方、それに週末にも友人の家を訪れたいが、市内以外の区域では、その時間帯にはバスが走っていないので困る。各路線バスは色分けをしてわかり易くしてほしい。また、時刻表は文字が小さすぎる」

それにたいして、一人の議員が立ち上がり、

「昨年、障がい者センター前にもバス停を設けました。たしかに時刻表の文字は小さく、読みづらいですね。もうすこし大きくするように働きかけてみます」

次に、ボクが作業所で見かける人が立ち上がったのだ。

「自分が勤めている作業所には、一般のバスが止まる停留所がないので、作ってほしい。お願いします」

議員と市長は、その要望を手帳に書いていた。

少しすると、ボクが街のなかでよく見かける、車イスのつた人が言ったのだ。

「僕は市議会のなかで働き、街がつくる規則、とくに、バス運行についての協力がしたい。僕はどこに何が欠けているかを知っているから。しかし、僕は字を読むことができない。それでも協力可能ですか。それから市議会のなかで、僕たちを代表している議員はいませんか」

それを聴いた一人の議員が、立ち上がり、

「議会では多くの書類があつて、字が読めないと議会のなかで働くことは難しいかもしれない。ただ、皆さんが市議員に電話して、皆さんの要望なりを伝えれば、その議員がこの議会で話をするでしょう。今のところ、皆さんを代表している議員はいません」

次に、二人が同時に立ち上がり、そのうちの付き添っている人が紙に書いた文を読み上げたのだ。

「街の真ん中に、少人数制のグループホームがあるとうれしい。そうすれば、バスでも電車でも容易に乗れるし、スーパーマーケットやパン屋、それに郵便局に一人でも行けるし、自立できるのだから。また、街の通りも車椅子で容易に動けるようにしてほしい。それに道路標識などは目立ち易いシンボリックなものにしてほしい」

その他に、いくつか要望を出したボクたちだった。

二時間の話し合いの最後に、市長が立ち上がったのだ。

「皆さんに何かの問題が生じたら、新聞などの市民の声欄に、皆さんの要望を訴えるようにしてください。だれかが皆さんのところへ行き、皆さんの願いを聞き入れるまで待っていてはいけません」

市長も議員たちも、ボクたちの言うことに耳を傾けていた。

翌日の新聞に、この話し合いの記事が写真と一緒に大きく載ったのだ。

パパとママは、地域のなかで、ボクたちの生活ができる限り通常の生活条件に近い状態

で暮せるようにとの考えに、とても熱心なのだ。ボクたちが誇りと自信を持って、地域のなかで暮らしていけるように見守っているのだから。ボクたち一人ひとりの命が、輝くような社会であるようにと願っているのだ。ボクらは黙っていてはいけない。自分の思いを主張しなければならない。地域のなかで楽しく暮らすためにも。

皆の前で、ボクは何も言わなかったが、毎日の暮らしのなかで、自分自身を出しているのだ。

たとえば、買物でもそうだ。学校に通わない日は、一人で家から百五十メートル先のパン屋に行き、焼きたてのパンを十個買ってきて、それをママに渡すと、「ごころうさん」といつも笑顔で言うママ。そうすると、ボクも笑顔になるのだった。

そのあと、おばあさんを含めての朝食だ。

おばあさんが、

「彼が買ってきたパンは、いつもおいしいわ」と、いつも言うのだ。

パパとママは、将来はボクが家から歩いて一分もしないマルクト広場で開かれている朝市で、一人で買い物できるように望んでいるのだ。でも、先のことはよくわからない。今の自分をありのままに出しているの、未来のことは頭のなかにまったくないからだ。

その他にも、ボクは学校のある日は四時に家に帰り、そのあとパパと買物に出かけるのだ。パパが、「今日はマーボー豆腐にするよ」と言うと、ボクとパパは自然食料店に行き、ボクが豆腐を見つけ、それをレジに持っていく。お金の勘定はできないので、パパが支払い、つり銭をもらうボクだった。

次は、いつもの肉屋だ。ボクはこの店の馴染み客となっていて、おばさんがかならずハム一枚をくれるのだ。これが美味しいのだった。

それから、マルクト広場に面した小さなスーパーで、かごに入ったものをレジに持っていくボク。パパがお金を払っている間、レジ係の人からいつもアメ玉を一つ、三つももらう。

でも、アメやチョコレートはあまり好きでないで、それをパパに渡すと、それを口に入れるパパだった。

パパは甘いものが好きで、歯が痛くなると近くの歯医者のところによく行くが、ボクは年二回の歯の検診でいつも虫歯がなく、褒められるのだ。寝る前に、パパが歯磨きの指導をしていたからだ。自分の歯の痛みを、ボクにさせたくないのだろう。

そのあと、マルクト広場でいつもお店を出している八百屋へ行き、パパがネギや果物を買っている間、ボクは近くで奏でているストリートミュージシャンのメロディーに合わせて体を動かしていると、まわりの人は、踊っているボクの姿を見てにっこりするのだ。とくに、女の人が微笑んでくれる。ボクは自分を出しているだけなのに。

パパとボクは、時々テュービンゲン駅から出る電車に乗り、隣の駅まで二人で買物に行くこともあるのだ。ボクとボクに付き添う人は公共の乗物なら、どこに行こうと無料なのだ。

車内に車掌が来ると、自分の手帳を見せるボク。車掌はもうボクのことを知っているの、検札をしないことも時々あるのだ。その時は、車掌のあとを追いつ、自分の手帳を見せるのだった。

パパは電車に乗っているのが好きで、黙ってよく外を眺めている。その時は、ボクも外

を見ているが、時々退屈になるので、パパの足を蹴ったりして、

「話しをしてくれ、遊んでくれ」

と、意思表示をするのだ。そうすると、パパはボクに話しかけてくれる。

ボクは特有な顔をしているし、パパは髪の毛をうしろで結んでいて、この街でも近くの街でも、何か変わった二人と見られているようだが、そんなことにお構いなく、ボクと一緒に買物をするパパだった。パパはボクと一緒にいる時が楽しそうで、それはボクも同じだ。

買物だけではなく、夏休みも楽しいのだ。ママとパパと一緒に、毎年山登りをするからだ。

## 第九章 エーデルワイスを見つめるパパとママ

ママがコップに入ったりリンゴジュースを、ハンドルを握っているパパに手渡ししながら、「デュービンゲンを発つて、もう六時間が過ぎたわ。あとどのくらいで着くの？」

と話かけると、パパは、

「オーストリアとイタリアの国境を越えてからに一時間経ったので、この高速道路をあと四十分間走り続ければ、目的の地、ザイス村に到着するよ」

と言ってから、パパはそれを一気に飲んだのだ。

ボクもママからジュースをもらい、それを手にしながら、窓の外に映る山々を眺め続けていた。

少しすると、ママが体を半ひねりしながら、

「向こうの山々の頂上近くにある白い形をした雪を見てごらん。ほら、あれはウサギのような姿だわ。その隣はウシのようね」

と、言った。その方向に目を向け続けていたボクだった。

車が高速道路から出ると、まわりはもう緑の草原なのだ。それを見たママが、明るい声を上げたのだ。

「赤や白や黄色の花々が見えはじめたわね」

「今年は、いつもよりも早い山歩きだ。この六月下旬は山が開くときで、一斉に花が咲き始めるのだよ」

「そうなの。今年の山登りは、わたしの希望が叶ってうれしいわ。以前から、高山植物の花が咲き揃う時期に、山に入りたかったから。胸がワクワクしているわ」

ママの声は、弾んでいた。

目的地に到着すると、パパは早速村の観光案内所へ行って、これから九日間宿泊する休暇用貸住宅がどこにあるのかを訊いてから、そこへ向ったボクたち。

ママが貸住宅の玄関ベルを押すと、頬が赤くなった腰の曲がったおばあさんが出てきて、ボクたちを部屋に案内してくれた。

そのおばあさんと別れたあと、ママがパパに言ったのだ。

「住居内は広いわ。三つの部屋とキッチン付きで一人千六百円、安いわ。それに見晴らしのよいバルコニーもついているわね。村外れの森近くに建っているし、気に入ったわ」

翌朝、小鳥たちの鳴く声で目が覚めたボク。バルコニーに出ると、パパとママがバルコニーで話をしていた。

「小鳥たちがピーピー・キューロキューロ・ヒューヒューヒと明るい声で鳴いているわ」「さつきから聞いているのだけど、鳥たちの大合唱だ。こんなにもいろいろな声で鳴き交わしているのを今まで耳にしたことがないよ」

「わたしもよ」

少しすると、ママが声を上げたのだ。

「あら、カッコー鳥の呼ぶ声だわ」

パジャマ姿のまま、小鳥たちの声を聞き続けていたボクたちだった。

朝食を済ませてから、昼食用のおにぎりを作りはじめたパパ。それを見ていると、パパから一口で食べられそうな小さいおにぎりをもらい、それを口にしていると、お昼に大きなおにぎりを食べるのが楽しみとなったボクだった。

朝食の片づけをしてから、山登りの準備を終え、今日の目的地へ車で向ったのだ。

十分もすると、パパがママに言ったのだ。

「ヨーロッパのなかで一番広いとされている緑の高原地帯、ザイサーアルム（標高一八〇〇メートル）まであとすこしだ」

「どのような花が咲いているのかしら。透いた青空だし、しばらくしたら、快晴となるでしょうね。歩くのが楽しみだわ。あなたも花の名前をいくらか覚えてたでしょ？」

「毎年、アルプスに来て、きみから教わっているのだから覚えてたよ」

ボクたちが乗っている車は、薄暗い森のなかをゆっくりと走り続けていた。と、急に目の前が明るくなり出して、草の匂いが漂いはじめてきたのだ。

さらに進んでいくと、パパが、「車は、これから先は入れない」と声を出したので、車から降りて、小さなリュックサックをそれぞれ背負い、歩き出したボクたちだった。

十分もすると、ママが言った。

「今までうつすらと立ち込めていた朝霧が晴れて、濃い青空が見え出してきたわ。山の新鮮な大気が体中に流れ込んで、爽涼な気分になってくるわ。あたり一面緑の草原ね。そのなかに、緩やかな曲線の道が数キロ先まで続いているのが見えるわ。なんという優美な光景なのでしょう」

広い草原の奥に望める高い岩峰を眺めながら歩いていたパパが、ママに説明しはじめたのだ。

「向こうに望める三、〇〇〇メートルの岩峰群には、ドロミテ特有のマグネシウムが含まれているのだよ。ほら、どの峰々も、天を突くように聳え立っているね」

「怪奇的な姿だわ」

しばらくすると、ボクの前を歩いていたママが、足元に咲いている花々を見ながら、

「あ、これはアネモス・トリカブト・キンバイソウ・アザミ……」

と、声を出しはじめたのだ。

「あなた、見てよ。息を飲むほどの鮮やかな青紫色したエンチアン（リンドウ）だわ」と言うと、パパもその花をじっと見ていた。ママは、なおもまわりに咲いている花々を見続けたあと、再び弾んだ声を出したのだった。

「高山植物が競い合うように咲き乱れ、あたり一面がいろいろな色をした花々で膨れ上がっているわ。花に優しく迎えられたような気分になってくるわ」

柔らかい土道を踏み続けていると、ボクの山靴が沈み込んでいき、体が浮いたようになってくるのだった。

ママが遠くを見ながら、感嘆した声でパパとボクに言ったのだ。

「見渡すかぎりの大草原だね。緑と花と岩とが視界を独占していて、まるで絵本のなかに出てくる風景だわ。それに牛のカウベルの音色がやわらかい風に乗って、あたりに響き渡っていて、これがアルプスのね」

ボクは道行く人とすれ違うたびに、「モルゲン（おはよう）」と声をかけると、相手からはボンジョルノ、グッドモーニングなどのことが返ってくるのだ。それを耳にする度に、笑顔となるボクだった。ルンルン気分だ。

朝から夕方まで、草原に咲く花々を目にして歩いてボクたち。宿に戻ると、三人とも疲れが出てきたので、棒のようになった足をソファーに伸ばしたのだ。と、外で鳴いている小鳥たちの声が耳に入ってくるのだった。

パパが、つぶやいたのだ。

「彼らと一緒に歌っているような気持ちになるな」

少しすると、パパがまたつぶやいたのだった。

「窓を通して、沈みかけた朱色の陽が、松の樹間からキラッキラッと射し込んできて、夕暮れの光り輝いている星のようだな。心が洗われたようになって、解放された気分になるな」

パパは若い頃、山小屋の主人になりたかったとママに語ったことを、ママから聞いたことがあった。新婚旅行は、山登りだとも話してくれた。

窓辺に咲いている赤や黄色の花を見るではなしに眺めていると、ウトウトとなつてしまい、眠ってしまったボクだった。

翌日も翌々日も、この草原が気に入り、澄み切った青空の下を歩き廻っていたのだ。

次の二日間は雷のともなう雨だったので、部屋のなかでゲームをしたり、外に買物に出かけたりして過ごしていたのだ。時々雷が鳴り響くと、パパの傍に行くボク。そうすると、パパがボクに言うのだった。

「明日は、晴れるぞ。きっと晴れる。そうしたら、また山歩きだ」

翌日、目が覚めてから外を見ると、青空によるこんだボク。

車に乗り、しばらく行くと、高い山々の連なりが目の前に見え出したのだ。と、ママがパパに訊いたのだ。

「あの山に登るの？」

「ああ、薄ねずみ色をしたいくつもの険しい岩峰が、角を立てたように天に向かって聳え立っているだろ。ローゼンガルテンという山だよ」

「数日前に目にしたお花畑とは、まったく違う景觀ね」



「これからが、本格的な山登りとなるよ」

車から降りてから、ボクは二人乗りのリフトに乗ったのだ。パパと一緒に怖くはなかった。そのパパが言ったのだった。

「標高二、三〇〇メートル地点で降りて、そこから歩き出すよ」

岩場の狭い道を南へ向かって登り出すと、手に息を吹きかけながら、ママが、

「周囲には樹木はなく、岩だらけね。岩場の合間に、薄黒くなつた残雪がこびりついているわ」

と、言ったのだ。

二十分もすると、ボクの体は少しずつ暖かくなり出して、前に出す足の運びがスムーズになってくるのだった。

ママが足もとに目を落としながら、前で歩いているパパに話しかけたのだ。

「ピンク色の小さな花シレネ・アカウリスだわ。大きな石の上に張りついたように密集して可愛いわね」

「草原に咲く花もいいけれど、このような険しい道を踏みながら、ふと出遭う花もいいね。花と交差する瞬間、『ああ、きれいだ』と感嘆の聲が自然と出てくるよ。高山に咲く花は、身丈が低く葉も小さいが、品と気高さを備えていて、なによりも清楚さがあるね。可憐なのだ」

パパとママは、その花をじっと見つめていた。再び、歩き出したボクたち。

しばらくすると、パパがママに言ったのだ。

「陽が次第に高く昇るにつれて、前に立つ岩壁に朝日が照りはじめたな。ここが、赤い壁と呼ばれているところの直下だよ」

「大きな岩だわ」

「直立するこの大岩壁に落日の陽があたれば、赤みを帯びるらしいよ。その残照はさぞ美しいだろうな」

しばらくの間、大きな岩のまわりを歩き続けていたあと、こんどは下り道となつたのだ。少しすると、ママが声を出したのだった。

「今までの砂道から土の道に変わった途端、何種類もの高山植物が目の中に飛び込みはじめてきたわ」

しばしば足を止めては、「これは、何々よ」と花の名前をボクたちに言い続けながら、歩いていったママだった。

かなり急な坂道になった時だった。道端に浮いていた小石に、パパは足をとられ、山側の斜面に尻もちをついてしまったのだ。と、パパが声を発したのだった。

「あつ、こんなところに！ 岩石の裂け目にアルプスの星と呼ばれる花が、四つ咲いているではないか。エーデルワイスだ」

それを聴いたママが、

「えっ、本当なの？」

と言いながら、パパのところに駆け寄つたのだ。

「自生のは初めてだわ。人工栽培で、何回も目にすることがあったけれども、まさか、ここで出遭うとは」

しばらくの間、その花に目を注ぎ続けていたパパとママだった。その姿を見て、にこに

こ顔となるボクだった。

さらに下って行くと、ママが、

「松と樅の樹海のなかに入ったわ。今までの暑さから、急に涼しくなったわね。樹と土の香りを帯びた大気が、肌にとても心地良いわ」

と声を出して、エーデルワイスの歌を唄いはじめたのだ。それを耳にしながら、歩き続けていたボクだった。

翌朝寢室のカーテンを引いて外を見ると、昨日と同じような青空なのによるこんだボク。朝食を終えたあと、宿のおばあさんがママに、

「今、アルペンローゼ（アルプス石楠花）が誇るように咲いているところがあるから、そこへ行ってみたら？」

と、薦めたのだ。それを聴いたママが、

「アルペンローゼを見たいわ」

と言うと、

「よし、そこへ行こう」

と、応えたパパだった。

車に乗って、しばらく走り続けてから、リフトで高さ二、二五〇メートルの地点で降りて、直ぐに歩き出したボクたち。

少しすると、パパがママに説明しはじめたのだ。

「あの正面の大岩山（三、一五二メートル）は、セラ岩峰群。その右手奥に急峻な岩山ラングゴツヘル（三、一三八メートル）が雄々しく聳え立っているね。学生時代、あの周辺の山々を歩いたことがあったよ」

「そうなの。まるで大巨岩が、突如平たい地盤を突き破って出てきたかのような格好ね。なんて偉容な山なの。現実の世界とは思えないわ」

草原の尾根道をゆつくりと歩き続けていたボクたち三人だ。

まわりに咲いている花を見ながら、ママが言った。

「黄色い丸いキンバイ草だわ。それに色鮮やかな青紫色をしたリンドウと小さなアザミが、競い誇るかのように咲いているわ」

三十分もすると、突如真紅の色をした花々がボクたちの前に現われ出たのだ。それを目にしたパパが、ママに感嘆した声を出したのだ。

「つつじ科の花アルペンローゼだ」

「そうね。赤い帯状が、百メートル以上もなびいているわ。なんて、深みのある色なの」その花々を眺め続けていたパパとママだった。

一時間近く稜線を歩いてから、こんどは松と樅の樹で覆われた森のなかに入ったのだ。と、ママが声を出したのだった。

「今までの強い日差しから解放されて、急にあたりが薄暗くなったわね。爽やかな気持ちになるわ」

さらに歩いて行くと、パパがうしろにいたママに、「あ！ 鹿だ。それも二頭だ」と低い声で言ったのだ。

鹿はボクたちの行く先を案内するかのように、時々姿を現しては消えていったのだ。森

の奥へどんどん進んで行くと、パパが声を出したのだった。

「無人の小さな丸太小屋だ。ちょうど、昼食を摂ろうと思っていたところだ」  
そこで、おにぎりを食べるようになったのだ。

小屋前の広い草原に座り込んだボクたち。あたりには色々な花が咲き、近くを流れる沢の音を耳にしながら、かつおぶしと梅干入りのおにぎりを食べ出したのだ。

そのあと、三人とも草の上に体を横たえたのだった。

ボクは目を開けながら、青い空にポツカリと浮かぶ白い雲を見ていた。ママとパパが話していた。

「この姿勢から眺める花は、今までとは違った姿に見えるわね。蝶たちが花から花へと飛び廻っていて、のどかね」

「そうだね。風につて、松ヤニの甘酸っぱい香りが漂い、自分の存在さえも、時の流れさえも忘れてしまうな」

柔らかい草の上に体を横たえ続けていたボクたち三人だった。

再び歩き出すと、こんどは今までとは違い、急な下り道となったのだ。

パパが、ママに声を高くして、

「地図にも記されていない健脚向きの道だから、彼の手を握って下りるから、きみは慎重に足を運んでくれ。とくに、枯れた松葉が地面に一センチほど積み重なっているので、足をとられやすいので、気をつけてくれ！」

と、言ったのだ。ママは、怖がりではなかったが、「早く、このくだりを終えたいわ」と言いながら、ボクとパパのうしろを歩き続けていた。一步一步足をたしかめながらの歩きとなったのだ。

しばらく続いた急傾斜の途中、ママは一回、ボクは二回ほど転んでしまったのだ。でも、パパと手をつないでいたので、安心して歩いていったボクだった。

やっと緩やかな道に出た時、ボクたち三人は笑顔で、

「やった！」

「やったね！」

と、声を上げながらのハイタッチとなったのだ。

何も起こらなかったのだ、ホッとしたような表情のパパだった。そのパパがママに、言ったのだ。

「登山者の姿がないこの道で、急に雨に降られたらと思ったら、ゾッとしたよ。恵まれたと感謝しなければならいな。まして、彼の筋力は弱いので」

「そうね。でも、毎年の山登りで、彼の足は鍛えられているわね」

それを聴いたボクはにっこりだ。

宿に戻ると、ママが、

「疲れが急に出てきて、わたしの両足の筋肉が張り出してきたわ。痛みもすこし走りはじめたわ」

と言ったので、夕食を済ませたあと、ボクたちはシャワーを浴びてから、ベッドに潜り込んだのだ。

翌朝起きると、昨日の疲れがまだ残っていたので、一日中、宿でのんびりと過ごすことになったボクたち三人だった。

最後の日の夕食は、ママの案で、宿から歩いて十分ほどの丸太造りの山荘風レストランで摂ることになったのだ。今回の山旅で、初めての外食なのだ。

中庭の真ん中に置いてある、分厚い木の丸いテーブルを囲んでの食事だ。

ママがワイングラスを手にしながら、

「夕陽に照らされたシュレーンの大きな岩山、美しいわね。岩壁が時間を追うごとに、オレンジ色から淡い赤に変わり、やがて今は濃い赤色になったわね。なんという色彩の演出なのでしょう」

と明るい声を出すと、

「光が醸し出すスペクトルだ」

と、満足そうな顔で応えたパパだった。

パパがママとグラスを重ねると、その音色があたり一面に響き渡っていったのだ。

ママがグラスを手にしながら、

「アルプスの三大花といわれているエンチアンとエーデルワイス、それにアルペンローゼを見たわね」

とパパとボクを見ながらにこやかな顔で言い、陽に焼けた顔にワイングラスを近づけた。それを見たパパが言ったのだった。

「明日から、またテュービンゲンでの生活になるな。彼は特別支援学校へ、きみは職場へ。わたしは主夫の活動だ。三人ともここでエネルギーを得て、戻るのだ」

「そうね。自然から力をもらったわね」

そう応えながらグラスに残ったワインをまた飲んだママ。そのママに、パパが、

「このような大自然のなかにいると、自分が素直になって、調和した、平和的な気持ちになるね」

と言うと、

「ありのままを出している、彼のようになるわね」

と、応えたママだった。そのママが、ボクを見ながら、

「楽しかった？」

と、訊いたので、

「ヤアー（ウン）」

と、笑顔で答えたボクだった。

## 第十章 大晦日は雪の森で過ごすボクたち

夏休みと冬休みには、自然のなかを歩き廻るのが好きなボクたち。雪の上を歩くのが好きなパパに連れられて、家から車で一時間走ったところにある黒い森へ、再び向ったのだ。パパが、助手席に座っているママに言った。

「あとすこしで、小さな村サイクに到着するぞ」

「あたり一面、雪が五十センチくらい積もっているわね。真白い世界、きれいだよ」  
ママは、窓から外を眺め続けていた。

しばらくすると、ハンドルを握りしめながら、パパが声を出した。

「これから滞在する休暇用住宅が見え出したな。あの坂道を上りきれればいいのだ」

車は森の入口前に建つ三階建ての大きな家の前に停まり、これから六日間に必要なものを運びはじめたボクたち。

翌朝ベッドから起き出してから、三階の窓から外を見てみると、ママが寄ってきた。

「タンネ（樅の木）が、十五メートルほど先に何本も見えるわね。どの先端にも、白と黒色をした尾の長い鳥が身動きもしないで止まっているわ」

窓に映る外の白い景色を眺め続けていたボクだった。

夏と違い、小鳥たちの鳴き声はまったく聞こえない。パパもボクたちの横に来て 外を眺め出した。そのパパが、ママに言った。

「森閑とした雪景色だね。標高千メートルの、それも高台のここからは下に村がよく望め、点々と建つ民家の三角形屋根には雪が厚く積もり、レンガ造りのエントツからは煙が立ち昇っているな。黒い森地方の村景色だ。雪化粧が、さらに静けさと呼んでいるね」

「そうね」

窓に映る風景をしばらく見続けていたボクに、ママが、

「あら、野生の鹿がピョンピョンと雪を蹴飛ばしながら森のなかへ走って行くわ」

と、言った。そのほうに目を向けたのだが、その姿をとらえることができなかった。残念だ。

朝食を済ませてから、雪用の装備を身につけ、ストックを持って外に出たのだ。

五分も歩けば、もう森のなかだ。灰色の空を見上げていた。パパが、「今にも雪が降ってきそうな天気だ」と声を出したのだった。

一時間ほど歩いていると、パパが言ったように、雪がパラつきはじめ、風が吹き出してきたのだ。しかし、ボクたちの歩きには支障はない風だ。

パパが、ママに話しかけたのだ。

「新雪を踏んでの道は、体が沈むようで気持ちいいな」

「そうね。木と木の間に雪がふつくとした餅のように積もっているわね。そこに風が吹くと、キラキラと輝きながら粉雪が舞うわ。冬ならではの景色だよ」

雪が枝からバサバサと落ちる音を耳にしながら、歩いていたボクたち三人。ふと、パパの顔を見ると、髭がツラツラのようになっていた。ボクの吐く息は、真っ白だ。

翌日も翌々日もドン曇り空の下、朝から夕方まで、雪道を歩き廻っていたのだ。

宿に戻ると、パパがボクとママに、

「さあ、明日は大晦日だ」

と、言ったのだ。

翌朝、ベッドから起き出して窓から外を見ると、今まで曇り空とは違っての青空に、にっこりしたボク。

朝食を済ませたあと、ストックを持って歩きはじめると、ヤツケがいらないほどの暖か

さになった。

昼食の時間となったので、雪の積もっていない石の上に腰かけて、宿で作ったお弁当をリュックから取り出し、食べはじめたボクたち。

おにぎりを口に入れていているボクに、ママが小さな声で言った。

「ほら、あそこをござらん」

直ぐそのほうに目を向けると、二匹のリスが見えた。パパはリュックからカメラを取り出し、その姿を撮ろうと構えたが、リスはもういなかった。残念がっているパパに、ママが、小声で言ったのだ。

「ほら、あそこにも」

でも、その姿を、パパもボクも見つけることはできなかったのだ。

くつきり晴れ上がった空の下、雪道を一日中歩いたので、顔は赤く焼けてしまったボクたち三人だった。

宿に戻って、ソファーに座ってから熱い紅茶を飲み出すと、ボクの体は段々と暖かくなっていったのだ。パパとママが今日歩いたコースを話しはじめ、そのあと、夕食作りに取りかかったママとパパだった。

美味しい夕食を食べ終えたあと、ママがパパに言ったのだ。

「今日は、十二月三十一日ね。最後の礼拝に出席したいわ」

肯いたパパだった。

再びストックを持って、下の村へ向って歩き出したボクたち三人だ。

しばらくすると、ママがパパに話しかけた。

「薄暗いなか、雪明りであたりはやわらかい青色になって、明るいわね。神秘的だわ。それに両側に立ち並んでいる菩提樹と楓の枝には、氷柱が垂れ下がり、樹全体が裸のまま、自分を誇っているかのように見えるわ」

「そうだね。自分の存在を誇っているのだよ」

「一本、一本の木々、それぞれ個性があるわね」

「同じ姿でないのが、素晴らしいな。ミヒヤエルのような」

「その通りね」

ボクのほうを見てにつこりしたママだった。

ボクたちが雪道を踏むたびに、サクッ、サクッと音がして、あたり一面に響き渡っていったのだ。ボクの体は浮いたり沈んだりして、愉快的気持ちだ。そのボクに、パパが何度も注意したのだ。

「凍ってしまった雪の上は、ストックを突きながら慎重に歩くように！」

しばらくすると、教会の灯りが見え出すと同時に、教会の鐘がカーンカーンと鳴り出した。その音に誘われるようにして、堂内に入ったボクたち。

長椅子に座っていると、パパがママに言ったのだ。

「村人十五名くらいがいるね。ギターの演奏での式のはじまりだ」

「この小さな教会、ギターの響きがとてもいいわ」

耳を澄ましているママだった。ボクはギターの曲に合わせて、体を動かすはじめたのだ。その式が終り、外に出て、再び雪道を歩き出したボクたち。

少しすると、ママがパパに言ったのだ。

「家族が向こうから歩いて来るわね。家族全員、手にたいまつを持っているわ」

ボクたちは、「良い新年を！」とお互い声をかけ合いながらすれ違ったのだ。

ママがうしろを振り返って、

「五つの大小のたいまつが、星月夜に照らされながら消えて行くわ。なんという幻想的な青い美しい雪景色なのでしょう」

と、声を出した。そのほうに目をやり続けたボクだった。

宿に戻ると、ママとパパが遅くなった夕食の支度に取りかかったのだ。

一時間ほどで、白菜と椎茸、それに薄い豚肉の入った鍋を囲んでの食事となったのだ。ボクたちが大好きな水炊きなのだ。

家から持ってきた箸で肉などはさみ、レモン入り醤油につけ、ご飯の上にのせて食べ出すと、ボクの体が少しずつ暖かくなっていった。

パパが、湯気が立ち昇る白菜を醤油につけながら、ママに言ったのだ。

「大晦日の夜は、日本にいたときはそばを食べたね」

「そうね。でもこれもお醤油の味よ」

につこりしたママだった。ボクたちは、「オイシイ、おいしい」と声を出しながら、残った汁をスープ替わりにして飲み干したのだった。

食事を終えると、パパが、

「夜中の十二時まで起きていよう」

と言ったので、ゲームをはじめたボクたち。

しばらくすると、ボクは、今日の疲れが出てきてしまったので、欠伸をするようになってしまったのだ。

少しすると、大きな音が外から聞こえ、それにつれて、カーテンの隙間から光が差し込みはじめてきた。パパが腕時計をのぞきながら、

「ちょうど夜中の十二時だ。爆竹がはじまったぞ。村外れに建っているこの家周辺は、大晦日の夜は静かだろうと思ったのだが、これもドイツだ」

と声を出して窓際へ向ったので、パパのあとについて行ったボク。そのボクに、パパが言ったのだ。

「近くに住む人たちが、打ち上げる花火だよ。ほら、至るところで、ヒューロヒューロと音を出して、光散っていくのが見えるね」

ママも来て、一緒に眺め出したのだ。

三十分ほどで静かになったので、ベッドに入ったボクたち三人だった。

翌朝、目が覚め、ベッドから起き出し、窓に映る白い景色を眺めていると、ママが寄ってきて、

「雲の切れ目に、ひと筋のオレンジ色の線が見え出したわね」

と言ったので、そのほうへ目を向け続けていたボクとママだった。

少しすると、パパもやって来て、

「オレンジ色の光が拡がり、朝日が照り出したな。新しい年のはじまりだ」

と言い、そのほうを見ながら、手を数回打ったのだ。それを見たママが、パパに訊いたのだ。

「何を願っているの？」

「皆の健康をね。とくに、お義母さんの健康が守られますように」と  
パパの真似をして、ボクも手を打ったのだった。

## 第十一章 おばあさんとの別れ

下の階に行くと、ソファーに座って、いつものように郵便箱から取り出した新聞を読んでいたおばあさん。その前で、ボクたち三人は、声を合わせて誕生日の歌を唄ったのだ。そのあと、ママはおばあさんを抱き、ボクはおばあさんの頬に自分の頬を重ね、パパはおばあさんの手を握りながら、

「八十七歳の誕生日、おめでとうございます」

と、言った。とてもうれしそうな顔を浮かべたおばあさんだった。

その誕生日から二ヶ月が過ぎた、ある日のことだった。おばあさんの体調が急におかしくなると、家から救急車で大学病院に運ばれてしまったのだ。

病院の先生から、

「八十七歳のお母さんは、心臓が極端に弱くなっています。明日、何が起ってもおかしくない容態です」

と告げられ、それを聴いたパパがママに言った。

「お義母さんをどうしても家で介護したい。彼女が安心していられるのは家だし、気を許せる子供たちと一緒に過ごさせてあげたい」

その願いが叶えられ、おばあさんは四週間ほど病院に入院してから、家に戻ってくるようになった。おばあさんと毎日会えるだろうと思い、よろこんだボクだった。

家に戻ったおばあさんは、何も食べないで、わずかの水分と点滴の日々となってしまうのだ。ママかパパが一緒の時だけ、ボクはおばあさんの部屋に入ることが許されたのだ。たった。

ボクが行くと、意識がすっかりしている時は、ボクの名前を言いながら、いつもの優しい顔を浮かべるおばあさんだった。

「おばあさん、おばあさん」と呼びかけるボク。と、ボクを見つめてにつこりするおばあさん。でも、直ぐにまた目を閉じて眠ってしまうのだ。おばあさんと一緒にゲームをすることが、できなくなってしまったのだ。

ママとパパそれにママのお兄さんたちは、おばあさんを毎晩交代で看ていた。ボクは、何度もおばあさんの手を触れたりして、挨拶を交わしたりしていた。

おばあさんが家に帰ってから一ヶ月経った頃だった。ママとパパが話し合っていた。

「昨夜、母を看ていた兄は、聴いたらしいの。母が二十五年前に亡くなった父の名前を何度と呼んだのを。今まで父の名前を口に出したことがなかったのに。それと、母のお母さんと亡くなった、わたしの姉の名前も呼んだらしいの。それから、咳も出て熱も上がったと言ったわ」



「再び、肺炎に罹ったのかな」

「そうかもしれないわ。心配だわ。母はここまでよく生きていると思うわ」

「そうだね。医者も看護師も心臓が弱い、お義母さんがここまで生きているのが、奇跡だとも言っていたからね。私たちのために、お義母さんは今の今を私たちと一緒に生きているのだよ」

「そうでしょうね」

「昨日は、ほとんど意識のないなか、『上を開けて、上を開けて』と声を上げていたな」  
「そうなの」

パパとママがこの会話をした翌日、おばあさんは亡くなってしまった。ボクは寂しくて、寂しくてしやがなかった。

パパは、おばあさんが急に倒れ、容体が悪くなったことを知り合いの人に手紙で知らせたり、亡くなったことを、パパが発行しているテュービンゲン便りに書いたりもしていた。そうしたら、日本にいるパパの友人や知人たちから、手紙が届いたのだ。それらの内容を、ママとボクにかならず伝えていた。

テュービンゲンに長く住んで、クリスマスの時はいつもボクの家に来て、食事を一緒にした。パパの友人からの手紙には、

「ご無沙汰しています。久しぶりのお手紙、拝見いたしました。お義母さんの具合が悪いようで、大変心配しています。看病をしつらやる皆様も、さぞ心配で辛い毎日だと思います。」

私も最近、考えるようになりました。誕生して、学校へ、それから結婚・家庭生活・初老の月日・老年の体調の変化、そのなかで今までいろいろと心配したり、苦労したり、喜んだり、悲しんだり、その時その時に人間が生きて行くと云う事は、大事業だと感じて居りました。でも、最後の死と云うことが一番大切で、その大切さをはつきりと身にしてみて感じるようになりました。

自分は信仰も無く、子供もいません。お義母さんはしっかりした信仰も有り、子供たちにも恵まれて居られるので、羨ましく思います。

神の御心のまし、自然の成りゆきを、お義母さんは感じていらつしやると思います。遠く日本の空より、一日でも長く生きてくださるようにお祈りして居ります。心残りの無いように、しっかり看病して上げて下さい。……………

誰にも訪れる死の瞬間は、静かで、安らかにしたいものと、考える年齢になりました。奥さんをしつかりと慰めて上げて下さい」

また、ボクの家から日本から三回ほど訪れてきたパパの知人からの手紙には、

「夕暮れと共に秋の虫がうるさい程鳴き、秋を実感しております。」

昨秋は、大変お世話になりました。その後、大変ご無沙汰しております。とは申しますものの、私はテュービンゲン便りにて、ご家族のご様子を伺っているので、とても身近に感じておりました。

お母様の具合はいかがでいらつしやいますでしょうか。案じております。

テュービンゲン便りでの人間の真理をついた、しかも哲学的な物の考え方をする横井さんの原点はどこにあるのでしょうか。毎回、文章を読ませて頂くたびに、それを思うのです。奥様でしょうか。それとも息子さんでしょうか。それとも、思考の構築のなかに組み

込まれていらつしやるのでしょうか。宗教家のような感じさえ致します。

私は少し前に〈地球交響曲〉という映画を、一番から三番まで見る機会がありました。この映画は、人間をひきつけて離さない魅力があり、根強い人気を持っております。三回ほど見ました。

オムニバス形式なのですが、その中で佐藤初女という日本女性が取り上げられています。彼女は三十年位前から社会的弱者とされている人々に、自宅を開放している人です。ある時、彼女は『あなたにとつて、祈りとは何ですか』と訊かれ、とっさに『生活です』と答えたのです。生活全てが祈りで、手を合わせるのが静の祈り、動いて働くのが動の祈り、だと言うのです。

私は日本人の多くがそうであるように、いわゆる無宗教に近いのですが、このことばは心の中にスーと入ってきました。spirit, body, mind, の三つの調和が、人間本来の姿であるとも解説しておりました」

パパの大学時代の山仲間で、一年間テュービンゲンに滞在した人からの手紙には、

「過日、グロースムターが逝去されたことを知りました。心からおくやみを申し上げます。奥さんも悲しまれたことと思っております。

グロースムターは良きヨーロッパ文化を体現していた方だと思っております。聖書の中に、隣人を愛せよということがありますが、常にこのことばの意味するところを体現されていた方だと思っております。

人生は時として、苦しみや悲しみに出会い、耐え忍ぶしかないという時があると思います。むしろ人生の実相としては、苦しみや悲しみのほうが多いのかもわかりません。

ただ、死と生とは断絶ではなく、継続しているものだと思います。生者は死者のためにあり、死者はそれと同時に生者のためにあると思います。悲しみの極にあっても、何か見守っていただけ大きな力といったものを信じたいと思います。

奥さんも悲しまれたことでしょう。どうぞ、心からのお悔やみを申し上げます、お伝え下さい。

また、家族と一緒に日本にお越し下さい」

パパが親しくしている人から届いたハガキには、

「お義母様のご逝去に心よりお悔やみ申し上げます。

天寿を全うされたお義母様は、充分に人生を生きた事と存じます。亡くなられた方には『ありがとう』と『長い人生、おつかれ様でした』の二つのことばに集約されるような気がいたします。

当分はお忙しい日々が続くと思われませんが、お体をお大切になさって下さいませ」

## 第十二章 ボクが生まれ、育ったところへ

おばあさんが亡くなってから、ママは元気がなかった。そこで、パパは日本を訪れる計画を企てたのだ。その日がくるのを待っていたママ。もちろん、ボクもだ。

いよいよ日本へ出発する日となった。二週間の旅に必要なものが入っているリュックをそれぞれ背負い、家を出たボクたち。

長い時間、飛行機に揺られてから、関西空港に朝早く降りて、直ぐにバスに乗って、ママが行きたかった京都へ向ったのだ。

桜の花が咲きはじめたのを眺めながら、いろいろなところを六日間歩き廻っていたボクたちだった。

京都を発つ前の日、パパとママが話をしていた。

「市内のお寺やお城、それと、祇園や三千院などを見て歩いていると、日本の情緒を色濃く感じたよ。とくに、『都おどり』に観にいった際、舞台で舞い踊る着物姿に魅せられたね。それに笛、小太鼓、三味線から出る音に、ミヒヤエルは、体を動かしていたね」

「そうだったわね。わたしも、ここに来てよかったわ」

「お義母さんをここに連れてきて、案内をしたかったな」

肯いたママだった。

次は、ボクが生まれたところだ。

そこへ行く途中、列車のなかで、ママがパパに話しかけたのだ。

「浜松は、二十年ぶりの訪問になるわ。懐かしいわ。これから、当時の人たちと会えるのね」

「きみが日本に来て初めて暮らしたところだ。未熟児すれすれの体重だったミヒヤエルを産み、乳をまったく飲まなかった彼に、なんとか飲ませようとして一生懸命に尽くしてくれたな」

「そうだったわね」

駅前からバスに乗って、パパが以前勤めていた施設近くの宿へ向ったボクたち。

宿でリュックを下ろしていたら、ママがパパに言った。

「わたしたちが住んでいた家へ、これから直ぐに行きたいわ」

「よし、そうしよう」

パパはそう応え、宿を出たボクたち。

歩き出して少しすると、ママが、

「私たちが住んだ家、二十年前とまったく変わらずに、建っているわ。五十メートル先の牛舎から、モウ、モウの声も聞こえるわ。昔と同じね」

と声を出し、しばらくの間、立ち尽くしていた。

そのあと、ボクを見ながら、ママがにっこりとした顔で言ったのだ。

「ここで生まれ、一歳まで暮らしていたのよ」

その家周辺を歩き出したボクたち。と、ママがパパに話しかけた。

「土と木の匂いがするわね。あなたの休みの日は、ミヒヤエルを乳母車に乗せて、三人でこの周辺をよく散歩したわね。その彼、こんなに大きくなって」

「そうだね」

ママはボクのほうに顔を向け続けていた。

ボクたちがここを訪問したのを知って、ママとパパの知り合いの人たちが会いに来た。そのなかでも、ママは、ボクたち三人が暮らしていた家の隣の家族と、長く話をしていた。

その家族と別れてから、バスと電車に揺られながら、浜名湖へ向ったボクたち。乗り物

が好きなボクは、窓に映る景色を眺め続けていた。

湖に着くと、ママが、「桜の花が、半分近く散っているわね」と声を出した。所々に黄オレンジ色の夏みかんがなっているのを見ながら、歩き続けていたボクたちだった。

次の日、バスに乗って浜松駅向かう途中、ママが隣に座っているパパに言ったのだ。

「信号前で停車するごとに、同じメロディーが流れてくるわね」

「そうだね。懐かしい歌だ。感傷的になるな」

パパはしみりした小さな声で、「うさぎ追いし、かの山、……」と口ずさんだのだ。

ママとパパの想い出深いところから、次はパパのお姉さんが住んでいる地に行き、そこで親戚の人たちと会い、伯母さんの家で一泊してから、ボクたちが長く暮らしたところ向ったのだ。

列車のなかで、ママがにつこりしながら、パパに「まもなく土浦駅ね」と言うと、肯いた。パパだった。

駅の改札口を出ると、パパの友人夫妻がボクたちを待っていた。ママにとっては十四年ぶりなのだ。にこにこしながら、その二人と握手を交わし、日本語で話をはじめたママだった。日本に来て十日間ほどいたせいだろう、日本語を思い出したようだった。

ボクたちは、これから二泊するために、その夫妻の家に行き、広い部屋に入ったのだ、と、ここで親しくしていた十五名ほどの人たちが、ボクたちを待っていたのだ。

ここに六年間住んでいたボクだったが、皆の顔はもう忘れていた。でも、ママは懐かしそうな顔を浮かべて、皆と握手しながら話をしていた。

皆が、ボクを見て、

「こんなに大きくなって」

と驚きの声を上げると、パパがママに言ったのだ。

「彼が小さいころは、モヤシのようなひよろりとした体つきだったからな」

「そうね」

ボクは日本語が口から出なかったが、自然と出る笑顔で、皆と握手を交わし続けたのだ。ママとパパの横に座って、皆と一緒にお鮎を食べ出したボク。パパが作る手巻きすしとは違う味だ。ボクの横で、ママが「オイシイ、オイシイ」と盛んに声を出しながら食べていた。当時の味を思い出していたに違いない。

醤油味が好きなボクは、おすしにたっぷり醤油をつけ、口に運んだのだ。パパは愉快そうに皆と語り合っていた。

夕食を終えると、眠くなってしまったので、一人で布団のなかに入ったボクだった。と、直ぐに眠ってしまった。

次の朝、パパの友人夫妻と一緒に朝食を摂りはじめたボクたち。昨夜は遅くまで話をしていたのだろう、寝不足のような顔のパパとママだった。

ボクは、朝食のご飯を三杯お替りしたのだ。日本にいた時、朝食はママに合わせてパンを食べていたが、ご飯を食べていた時期もあった。というのも、パパのお母さんと二年間一緒に暮らしていたからだった。

朝食を済ませてから、昔、住んでいた家へ向ったボクたち。

バスに乗って、停留所で降りて歩き出すと、ママが、

「田圃が見えはじめてきたわね。ほら、あの先を見て！ トタン屋根の木造住宅が今も建

っているわ」

とパパに言い、そのほうに目を向け続けていた。

その家の前に、ボクたちが立つと、ママがパパに話し出したのだ。

「ドイツから母が来たとき、この家で一ヶ月間、過ごしたわね。家周辺の景色は、ほとんど変わっていないわ。裏のピーナッツ畑は、今もあるわ。母とあの周辺をよく散歩したことがあったわ」

「きみは日本にいた八年間、ミヒヤエルとわたしの母とを看っていたので、日本を旅したことがなかったな。きみには感謝しているよ。今回、京都、浜松、土浦に来て、本当によかった」

「それは、わたしも同じよ。ミヒヤエルも一緒だったし、楽しかったわ。それに昔の知人たちとも会えて話しもできたし、日本にいたときのことを確認できたわ。人との関係が続いているのがうれしかったわ。ありがとう」

そう言って、パパの手を握ったママだった。

自然とにこにこ顔になったボクだった。

## 第十三章 働きはじめたボク

二十一歳になって、学校を卒業したボク。こんどはボクと同じような人たちが働く作業所に通うようになったのだ。そこへは、学校を二十一歳で卒業する一年前から実習に行っていたので、自分がどのような仕事をするかはもうわかっていた。

働き出して数ヵ月してから、パパが作業室を訪れてきたので、手招きで、「こっち、こっち」と呼んだのだ。と、パパはボクの作業台のところに来て、山のように積まれてある八色の粘土を見ながら、

「これらを色分けして、小さなプラスチック箱にきちんと入れるのが、きみの仕事か」

と訊いたので、ボクは肯いたのだった。

パパがボクの横に座って、一緒に作業を手伝いはじめると、ボクたちを指導しているトマスが寄ってきたのだ。

「彼は、よく働きますよ。根気があって」

「そうですか。いつもこの箱詰めをしているのですか」

「いいえ、一週間ごとに作業替えがあつて、彼は七種類の仕事のどれも上手にこなしていますよ」

「それはたいしたものだ」

パパは手を休め、ボクのほうに顔を向けてにっこりした。

日本にいた時、パパはボクたちと同じような人たちをお世話していたこともあって、この室にいる九名の人たち一人ひとりのところに気楽に近づき、話しかけていた。

ママが以前ボクに、「私たちが日本にいたら、パパは知的遅滞のある人たちと一緒に木のおもちゃ作りの作業所を開きたかったのよ」と言ったことがあった。ボクの仲間たちに

話しかけているパパの姿が、ボクは好きだ。

ボクもそうだが、ここにいる人たちは皆給料をもらっているのだ。ボクは手取りで一万三千円だ。ボクたちはそれぞれの能力に応じて、自分なりに働いているのだ。

パパも自分なりに、机に向って何かを書いて、それを書き終えたあと、日本のある文学賞に応募し、その結果を待っていた。

そのようなある日、作業所から帰宅すると、いつものように、パパがボクのために用意したパンとジュースがテーブルの上にはなかった。パパを見たのだが、パパは窓越しに映る垂れ下がった雲を、何かガッカリした顔で眺めているだけだった。いつもとは違っていた。

そのパパに連れられて、夕食の買物に出かけたのだが、ボクの右足の裏が痛く、足を引きずりながら歩いていたのだ。その様子に、何の表情も示さずにいたパパだった。いつもは、ボクの異常に直ぐに気づくパパだったが、今日は違っていた。

家に戻り、バスルームでシャワーを浴び出したのだが、立っていられずに、バス槽に座ってしまったボク。と、パパが、

「どうしたと？」

と訊いたのだが、答えずに座ったままだったボクだった。この時、初めてボクの異常にパパは気づき、足裏をのぞいたのだ。

パパは驚いた顔をしながら、バスルームからボクを出してから、居間のソファに横たわらせ、焼いた針でボクの足裏を突つきはじめたのだ。

針が刺さる度に痛みが走ったが、ボクは声も出さずにパパの顔を見ていた。

「トゲが深く入って、なかなか引き出すことができない」

パパはそう言うてから、ボクに、

「痛いかな、いたいかな」

と何度も訊いたのだが、歪んだ顔でパパの顔を見つめていたボクだった。

パパは、トゲをなかなか取り出すことができないでいた。こんどはまわりの皮膚を針で切り裂きはじめてたのだ。

少しすると、一センチくらいの黒いトゲを見たボク。と、その時、血の混じった白い膿が、パツと飛び散ったのだ。

パパはホツとした顔で、

「出たから、もう痛くないぞ」

と声を出したあと、ボクをベッドに横たわらせたのだった。

夕方になって仕事先から帰ってきたママに、パパが、

「日本に応募した作の通知が届いて、選外となったよ」

と伝えたあと、さらに続けたのだ。

「胸が塞がれ、そのことばかりに心が捕らわれて、ミヒヤエルの上にトゲが刺さっていたことも知らずに彼と買物に出たのだ。それから家に戻り、シャワーのときに、トゲに気づいたのだった。数時間も痛みがあったことだろう。これは、父親として、主夫としては失格だ」

そう言うてから、パパはママに以前勤めていた日本の施設で経験したことを語り出したのだ。

「一人の少年がいつもとは違う足取りで歩いていたが、そのことを気づかず、その子を入浴させようとしてズボンを脱がせると、大腿部に切り傷があつて、そこからまだ血がにじみ出ていたのだ。それを三時間以上も気づかずになっていた自分は、彼らをお世話する職員として失格だと思ったよ。それを、こんどは最も身近にいる息子にやってしまった。情けない」

ママは、パパの話すことに耳を傾けていた。

翌朝、パパに言われるままに体温を計ったが、熱はなく、立つても痛くなかったので、ボクは仕事に行くことになったのだ。

朝食を摂ってから、パパと一緒に玄関前に停まっていた作業所から迎えにきたマイクロバスのところに行き、バスに乗りうるとすると、パパが、

「痛くないか」

と訊いたので、自分の足先を指差して、

「パパ、パパ」

と声を出し、につこりしたのだ。

ボク的笑顔を見たパパは、ボクと一緒にいる時にいつも浮かべる顔つきで、

「ミヒヤエル、君的笑顔を見ると、ネガティブな気持ちがポジティブになるよ。ありがとう」

と、言ったのだ。

## 第十四章 タンデムに乗るボク

作業所のマイクロバスに乗って家に戻るようになったボク。でも、家のなかには直ぐ入らずに、玄関前をゆつくりと走る車を眺めたり、目の前を通る近所の人たちと握手を交わしたりするようになった。ただそれだけで気持ちが開放されたようになって、疲れが取れるからだだった。

もちろん、週末になると、パパとママと一緒に森のなかを散歩したり、車で遠出をしたりして、リラックスもする。その他にも、最近では自転車乗りが楽しくなり出したのだ。

ボクの前に座っているパパが、家の玄関前で、

「さあ、走るぞ！」

と声を上げて漕ぎ出したので、

「ヤアー」

と応え、パパと一緒にペダルを踏みはじめたのだ。

知り合いの人たちが、「ハロー」と声をかけてくる。そうすると、パパがベルを鳴らす。ボクは、「あつ、二人乗りのタンデムだ！」との声を何度も耳にした。

バランス感覚がよくないボクなので、一人用の自転車は乗れないが、タンデムだったらサドルの上に座り、漕ぐことができるのだ。

そのタンデムで、週末は街郊外やネッカー川に沿って設けられている自転車道を三人で走るようになったのだ。

ボクの前で、ハンドルを握っているパパが言った。

「道の両側に、麦畑が続いていて長閑だな。とどころに大きなヒマワリが咲いて、こちらを歓迎しているみたいだ。さあ、走り続けるぞ」

「ヤアー」

そう応えるボクだった。

大人と子供用に作られたタンデムなので、ボクとパパにはピッタリなのだ。前で「もつと漕げ！」とパパが声を出すと、「ヤアー」と応え、力強く一緒にペダルを踏むボク。

パパは何かと声をかけてくる。それに応じるボクなのだ。うしろで走っているママが、ボクたちの横に寄ってきて、

「まわりに映る景色、三人で共有できていいわ」

と、言うのだ。笑顔になって、走り続けるボクたち三人だ。

タンデムに乗りはじめた頃、家から離れた郊外の平らな道を走り廻っていたボクたちだった。が、少しずつ慣れてくるにしたがって、遠くにも行くようになったのだ。

ある時は、電車に自転車に乗せ、そこから走り出したこともあった。右と左に赤いリンゴの実を見ながらの走行だ。ゆったりとした気分となるボクだった。

上り坂となると、パパが、

「もつと力を入れて！」

と背を丸めながら、声高に言うのだ。

汗をかきつつ登り続けるボクたち。その時は、まわりの景色を楽しむ余裕はボクにはない。でも、パパの息づかいが伝わってきて、それに合わせたりもするのでもいいものなのだ。

下り坂となると、風を切つての走りだ。その心地良さは、ことばでは表現できない。「ヒエー、ヒエー」と声を発してよろこぶボク。これを体験したら、もう止められなくなってしまう。

ボクはこのタンデムが気に入り、日曜日になると、自分のヘルメットを持ち出して、

「さあ、走ろうよ」

と、パパに催促をするのだ。

「漕げ！」

「ヤアー」

うしろから、ママの「気をつけて！」の声が飛んでくるのだった。

パパと楽しさを共有することはいいが、そうでない時もあるのだ。最近、しばしば下痢をするようになってしまったボク。そこで、パパとママに連れられて家庭医のところに行き、下痢の原因を調べてもらうと、ミルクアレルギーとのことがわかったのだ。でも、治療方法はなく、お医者さんから、「食べ物に気を配るしかないですね」と言われただけだったのだ。

それ以後、ボクがバターやチーズやヨーグルトなどのミルク製品を食べないように気をつけるようになった。パパとママだった。

でも、作業所での昼食は多くの仲間と一緒に摂り、目の前のお皿に盛ったバターやミルクなどで作られた美味しそうな料理を目にすると、何でも口に入れてしまうボク。と、かならず下痢となってトイレに駆け込むのだ。間に合わない時は、パンツにもらしてしまう。



そのような日が月に二、三回はあるのだ。そのあと、シャワーを浴びるボクだった。

作業所の人、それにママやパパは大変だ。汚れたボクのパンツをいつも手で洗うママ。何も言わずに。

パパもミルクアレルギーで、ボクと同様に二十代半ば頃から、チーズやヨーグルトなどの乳製品を食べると下痢になってしまったとママに言ったことがあった。

ボクが下痢をするようになったのは、パパからの遺伝に違いない。ママの消化器官を継げば、すこしの黴菌でもびくとはしなかったのに。残念だ。

パパとボクは、同じ辛さを共有している。しかし、パパは自制できるが、ボクは自分でコントロールできない。パパとママはそれを知っているので、ボクは悩みなどしないし、暗い顔にはならない。

食べ物のことでは、このところうれしいことを、パパとするようになったのだ。

それはパパと一緒に、いつも夕食を作るようになったからだ。

「さあ、今日も最初にお米を研いでからだ」

パパにそう言われ、掌で米を握るようにして洗い、何回も水を替え、炊飯器にスイッチを入れるボク。そのあと、パパが、

「冷蔵庫から卵を二つ取り出して、それを割ってほしい」

と言ったので、力加減に気をつけながら器に入れるボク。

「そのなかに、砂糖を入れてかき混ぜてほしい」

「ヤアー、パパ」

「フライパンが熱くなったので、それを入れて」

溶けた卵を少しずつ落としていくボク。

「固くなったね。こんどはそれを包丁で細長く切ってほしい」

「次はキュウリだ。卵と同じくらいの大きさに切って」

「ヤアー」

「なかなか手が器用だな。その調子で、次はアボガドとシャケを切ってほしい」

「ヤアー」

「切り終わったら、今までのものをすべてお皿にのせて」

ボクは丁寧の一つひとつを盛っていく。

「さあ、炊き上がったご飯に、酢と砂糖と塩を合わせたものを混ぜるよ」

「ヤアー」

「これで、でき上がりだ」

そこで、パパとハイタッチだ。

テーブルにでき上がったものが並んだ頃、ママが仕事先から戻り、三人での夕食となったのだ。

掌に海苔をのせ、その上に酢の香りのするご飯とアボガドと薫製のシャケ、それにキュウリをそえて包むように巻き、わさびの入った醤油に、それをつけて口のなかに入れるボク。三人の好物の手巻き寿司だ。

ママがボクの顔を見ながら、

「今日のお鮨は、とくに、おいしいわ」

と言うと、ボクとパパは目交わしをして、にっこりするのだ。

パパと一緒に becoming 夕食作りをしたからといって、下痢の回数は減りはしないが、楽しい時間が増えたことをよろこんだボクだった。

## 第十五章 ボクたちの仲間たちが

家で料理や洗濯をしているパパは、ボクと一緒に過ごす時間が多い。でも、パパは家のことだけではなく、まわりの出来事や社会にも目を向けているのだ。ボク、それにボクの仲間たちを通して、社会全体を見つめているのだから。

たとえば、パパのところに、年に数回日本から、福祉関係の人たちが訪れてくると、その人たちをテュービンゲンから車で四十分ほど走ったところにあるマリアベルグという、ボクと同じような人たちが住んでいるところを必ず案内するのだ。その際、パパは自分の思いを書き記した数枚の紙を、その人たちに手渡すのだった。

ボクはパパとママに連れられて、そこで開かれたお祭りに行ったことがあった。その時、パパとママが話していた。

「ここに来ると、日本から訪れた人たちに、先ず見せる場所があるのだよ。ナチの時代、ここに住んでいた二百人のうち六十一名が殺害され、それを記した石碑のところなのだ」

「あなたは、ここを初めて訪れから、一週間近く毎日資料室に通い出していたわね」

「そうだったね。そこで、当時の歴史を調べていたかね。その内容については、きみに簡単に伝えたよね」

「ええ、そうね」

「すべてが関わり合いながら生きている私たちだ。ドイツの負の歴史を省みることは、未来を見つめるためには大切だと思うね。歴史は繰り返す可能性もあるし、それを避けるためにも、書き記しなかったのだ」

パパは何枚もの紙に書き綴ったのだ。  
【生きるに値せぬ命という名のもとに、知的発達遅滞のある人たちがなどが、殺されてしまった歴史がドイツにはある。

一九三九年に、第二次世界大戦が勃発した。と同時に、ヒットラーは、ある秘密命令（安楽死作戦）を出して、精神病患者を中心とした心身に問題を持つ人たちを、抹殺する計画を企てたのだった。

その作戦は、綿密かつ組織的に実行され、それによって、戦争中に十〜二十万人の彼らが、殺害されてしまったのだ。

それを可能にさせた社会的背景には、戦争という非常事態があったとはいえ、ヒットラーが政権を取ってから、この作戦を思いついたわけではなく、彼の青年期、もつと遡れば、一九世紀の後半から社会のなかで、その兆候が少しずつ芽生えていたからである。

それは、ダーウインによる進化論の考えからはじまり、生存競争から自然淘汰が起こり、優生学への考えと進み、有用性と業績能力を重んじる、人間の価値序列化の考えが浸透していたからだった。

その背景には、第一次世界大戦に敗れたドイツでは、経済的困窮も加わり、多額の費用と、より多くの労力を必要とする彼らを、経済的な視点から捉えようとする傾向があったのだ。

一つの例とあるして、一九二〇年の秋、知的発達遅滞のある人たちが暮らしている施設で、園長が、二百名の親にアンケートの手紙を送ったのだ。

その内容は、次のようなものだった。

『もし、あなたの子供に学ぶ能力がなく、治る見込みがないとわかった場合、生命に痛みのない死（生命短縮）をもたらすことを、あなたは同意しますか。あなたの子供がかなりの身体的苦痛を伴ったとき、生命短縮に同意しますか』

百六十二通の返答がきて、親たちの七三％が生命短縮に同意すると返事をしたのだった。この園長は、まさに、反対の数字を期待していたのだったが、結果は、生命短縮に同意する親が多かったのである。

当時の社会では、彼らは親からの遺産を受け継いでいることが、主な理由だとされていた。そのこともあって、ヒットラーは政権を握った一九三三年に、直ちに遺伝病子孫予防法を制定させ、同法は翌年から施行され、それによって三十万人以上の人たちが、断種（男女の不妊手術）を余儀なくされたのである。

ヒットラーにとっては、社会のなかで、役に立つ人のみが健康な人間で、それ以外の人には抹殺されるべきものだったのだ。

この安楽死作戦が一時中止になる一九四一年八月までに、判明しているだけでも、幼児や子供を除いて、ドイツ国内で七〇二七三名が殺されてしまったのである。

一時中止になったとはいえ、この作戦はそのあとも継続され、犠牲者は少なくとも十万人以上とも推定されている。この安楽死作戦は、六百万人ともいわれるユダヤ人大量殺害への前段階だったのである。

ナチ政権下による、健康的ではなく、価値も有用性もないと見られた人たちへの抹殺は、一九八〇年代になってようやく明らかにされはじめた。それ以前は、タブー視され、公にされてはいなかった。

一九八五年、ヴァイツゼッカー大統領が演説のなかで、第二次世界大戦中に殺害された精神病患者及び非人間的不妊手術について触れた。それがきっかけで、翌年の一九八六年に初めて、ナチ当時に断種を受けた人たちに、一時金五千マルクが支払われるようになったのである。

安楽死作戦から五〇年経った一九九〇年には、多くの施設で、記念碑が建てられて、今まで公にされなかった当時の記録が、公表されるようにもなり、人々へ語り継がれるようになっていった。

それによって、市民は、この抹殺が戦争中にだけ起こったことではなく、一九世紀後半からその芽生えがあったことを知ったのだった。

歴史が語っている意味は大きい。その歴史の鏡に映るのは、苦しみや悲しみを体験した人の姿だ。

ヒットラーによるこの安楽死作戦を、戦争を経験していない世代が知ることは大切だ。なぜなら、現代のように、バイオテクノロジー（生命工学）と遺伝子工学が発展するなかで、優生学的な考えである、美しく有用的な新しい人間がつくりだされるようになったら、社

会が混乱するからだ。それは、ナチ時代のこの作戦が示したように、社会が精神的混乱を迎えることになってしまう。

そもそも、いろいろな苦しみ、悩みを各自が持っているからこそ、人間は他の人への思いやりが生じてくるし、そこに、真のよろこびと、生きる意味を見出すことができるのだから。

一九八〇年代後半からドイツにも広がってきた、ある学者が考える生命倫理の思想に危険を感じる。そこには、自己決定意識や他の人へ働きかけるコミュニケーション能力、及び理性的能力を持つという人格（パーソン）の人だけが、生きるに値する価値を持っているとする考えが、あるようにも映るからだ。これこそ、ヒトラーのもとで行われた安楽死作戦に共通するように思えてならない。

それは、彼らへの敵対行為ともいえるだろう。彼らだけではなく、これは認知症の人や意識がなくなった人間や胎児にも適用されてしまう可能性がある。

以前、知的発達遅滞のある人たちが暮す施設で働いていたわたしの経験からして、どんなに重度の人でも、他の人に働きかける能力を潜在的に持っていると思っている。それを感じないということは、その人が他の人に働きかける力が足りないからではないだろうか。どんな人でも、命の尊厳はあるはずだし、その命は過去と今のまわりの人たちすべてとかわり合っていると思っているわたしのだ」

パパはさらに綴ったのだ。

「この国で長く暮らしていると、歴史が社会と人間を創っていくという考えになる。テレビなどでは、ナチ時代に起こったこと、六百万人ともいわれるユダヤ人大量殺害や精神病患者を中心とした人たち十〜二十万人が、殺害されてしまったことを頻繁に放映して、市民に詳しく伝えている。

また学校では、当時のことを隠蔽することもなく生徒に教え、議論をさせている。そのようにしながら、この国は過去を克服してきたのだ。

今のドイツの民主主義は、この暗い負の歴史から学んだところが多いだろう。歴史は、その時で終わるものではないし、生き返らせてこそ、私たちに明るい未来をもたらすのだ。なぜなら、歴史は生きているのだから。

ミヒヤエルと歩いていると、子供たちがよく彼を見つめる。ダウン症特有な顔付きをしているからだろう。

しかし、彼はそれにおかまいなく歩いて行く。そればかりでなく、音楽好きな彼は、時々出逢うストリート・ミュージシャンが奏でるメロディーに合わせて、気持ち良さそうに身体を動かして踊りだす時もある。

そうすると、まわりの人やミュージシャンは彼を見て、にこやかな顔になる。彼が自分の感情を素直に出し、周辺の人に安らぎを与えたと言えるだろう。

しかし、反対に、その情景を嫌う人もいるかも知れない。そのような人は、彼らを身近に見慣れてないこともあって、社会のなかにいる彼らの存在に、気づいていないからだろう。

私など彼らの存在に気づけば気づく程、関わり合えばあう程、そのことを通して社会のなかで、自分がどのように生きるべきかとの生きる意味を自分に問うことが多くある。とくに、重度の人は自らの語りかけが少ないこともあって、問いかけるこちら側の真摯な心

が大切となるからだ。

発達に支障をもたらしている人を見ると、とかくその人の全体が、あたかも問題があかのように捉えられがちだが、決してそうではないのを、私は彼らからよく学んでいる。とくに、彼らの生きる力強さに、畏敬の念を抱く時がしばしばある。

それは、自分に出来得る限りの可能性を積極的に追及して、よろこび、幸せ、生きがいを見つけ、そこに生きる意味を見出している姿だ。私の知人で、脳性マヒの彼が、

『この体が、自分の生きる源泉だ』

と語ったことを、聴いたことがあった。

その姿から、成績、能力、競争などの目に見える価値に重きを置く現代社会で、目に見えない、その人固有の生きる意味を、自分のこととして考えさせられてしまった。

とくに、現代は、自己の欲望を果てしなく無限に追い求め、他者との交わりのなかで、自分を制するコントロール力が弱くなってきているとも言えるだろう。そうしたなかで、彼らとの出会いは、大きな意味がある。

先日、私が住むテュービンゲン駅で、次のような光景に出遭った。

車椅子に乗った両足のない人が電車から降りようとしていた。それを見て、思った。彼は足の不自由さと共存して、自分のありのままの姿で、己をコントロールして生きているのだ。彼からすると、私たちこそ、問題を抱えていると映っているのではないだろうか。なぜなら、自分の欲望、それに自己中心的な己を強く持つ私たちは、それに振り回されているからだ。

毎日一緒に暮らしている息子を通して、いろいろなと自分を省みることが多くある】

パパが書き綴ったと同じようなことを、ママがパパに語ったことがあったのだ。

「わたしの姉は、あなたと知り合う二年前に三十八歳で生涯を閉じたわ。そのことは、あなたにも話したことがあったわね。

姉は、七歳までは普通の子供のように成長していたけれど、それ以後、急に筋肉の発達が止まり、こんどは、反対に筋肉が縮まって不自由な身になり、車イスの移動となってしまったわ。でも、頭の働きは一般の人と同じだったので、学校を卒業したあとは、本屋に勤めるようになったわね。

しかし、体の痛みと車イスに乗っての仕事だったので、長く続けることはできなかったわ。姉はユーモアに長じ、チェンバロに似たスピネットを弾き、きょうだい仲はよかったわ。その姉と暮らすなかで、命の輝きと尊さを学んだわ」

パパは耳を澄ましながら聴いたあと、ママに言ったのだ。

「自分の場合も、彼らとの出会いから、一人ひとりの命の尊厳と相手を敬う心を学んだよ。それは、今も続いている、生きる源となっているね。彼らとの出会いがあったからこそだ」

## 第十六章 体で表現するボクたち

ボクが働き出して、数年が経った時だった。パパとママに連れられて、テュービンゲン

から車で三十分ほど行ったところにある、やはりボクと同じような人たちが働いている大きな作業所を訪れたのだ。

建物内に入ると、受付でひとりの人がボクたちを待っていた。その人から、パパとママは、この作業所についての簡単な説明を受けていた。

三百人が座れそうなホールへ行き、これからじまろうとする催しを待っていたボクたち。ここに来た目的は、この催しを見るためなのだから。

作業を終らせた二百名近くの人たちと一緒に、舞台に視線を向け続けていると、幕が上がった。と同時に、勢いのある音が流れ出したのだ。

それが一分も続いていると、ボクと同じ仲間の人たちが椅子から立ち上がって、体を前後に横に動かしたり、飛び上がったたり、手を強くたたいたり、音に合わせて自分の体を動かし出した。

二曲、三曲とテンポの速いポピュラーソングが流れ続けると、大半の人が椅子に座ってはいないで、皆それぞれ個性あるアクションで自分を表現し出したのだ。もちろん、ボクもメロディーに合わせて、手を上下に動かしたのだった。

ママが、隣にいたパパに話しかけた。

「舞台では、ドラムやキーボード、それにアコースティオンやエレキギターやバグパイプなどの楽器をもった十三名の人たちが、力強いビートのある音を出して演奏をしているわ」

「マイクからは張りのある歌声も聞こえ、舞台と彼らが一体となっているね。音楽はいいね。それにこの熱気。いいね」

「そうね」

それを聴いていた、ボクらを案内した人がパパとママに話し出したのだ。

「彼ら十三名のうち、十名はここに通っている人たちで、そのなかには、ダウン症の青年も二名いますよ。あとのジープンをはいた三名は、牧師と高等学校の校長、それに特別支援学校の先生なのです」

「そうなのですか」

そう応えたあと、パパがママに言ったのだ。

「演奏をしている人も、耳を傾けている人も皆、笑顔だね。皆、ありのままの自分を出している彼ら。常に、ホンネのまままで生きている彼らだ」

「本当に、そうね」

「以前、施設で働いていた、過去の経験が一気に蘇ってくるよ。目から、涙さえ出てくるよ。食るような欲もなく、見栄もなく、かまいもなく、ひたすらに自分を出している彼ら。うらやましい限りだ。ここには真の触れ合いがある。真の触れ合いがある。存在のすばらしさだ」

皆と同様に立ち上がって、ビートの利いた音に合わせて両手をたたき出したパパだった。

ダンスをしたりするカップルも出はじめ、ボクもそうだが、皆体でよろこびを表現しているのだ。

「アンコール、アンコール」の声に押され、一時間半の予定を超過して何曲も演奏されていったのだ。

その様子を見ながら、足で地面を鳴らし、横に立っているママに、パパが言った。「時間は昔に戻らないが、以前経験したことが、新たな感動をもたらしてくれるね。これが自分の原点だ。過去から今に至るなかで、命のリアリーを体で感じるよ。ありがたい時間だ」

ボクと同様に両手を打ち続けていたパパとママだった。

## 第十七章 グループホームに挑戦するボク

夕食を摂ったあと、いつものように後片付けをしてから自分の部屋に戻り、好きな日本とドイツの童謡、それにモーツアルトの曲を聞くのが楽しみとなったボク。

そのようなある日、パパとママ宛に、一通の封書が届いたのだ。日曜日になると、ボクが時々訪れていた福祉センターからだった。

ボクたち仲間が自立を目指すことができるようなグループホームをテュービンゲン市内につくる計画があるので、関心があるようなら連絡してほしいとの知らせだったのだ。それを読んだママは非常に積極的だったが、パパは、ボクがまだその年齢に達していないと思ったようで、そう乗る気ではなかった。そのパパに、ママが言ったのだ。

「彼の最近の行動を見ると、これは一つのチャンスかも」

この手紙が家に届く半年前、二十七歳になったボクは、福祉センターが企画した一つのプログラムに参加したのだった。

それは、大学生のいない学生寮で、ボクたち仲間が夏休みの一ヶ月間そこに住み、親から離れて、自立するための生活を訓練するためのものだったのだ。

それから三週間してから、ボクたちを指導した人が、パパとママに、

「彼は、結構楽しんでいましたよ。ただ、髭剃りが出来ない、トイレのマナーが十分ではない、自由時間に何をしたらよいのかわからないなどの問題点はありましたが、親から離れての初めての経験にしては上出来でした」

と、伝えたのだ。

それを聴いたママは、ボクがグループホームに入り、そこで暮らして行くことに乗り気になったが、パパはそうでもなかった。そのパパを説得して、ママとパパは、福祉センターでの説明会に行くことになった。ボクも一緒だ。

センターまでの途中、助手席のママがパパに、

「この説明会に、どのくらいの人たちが来るかしら」

と、訊いたのだ。それには答えずにハンドルを握り続けていたパパだった。

夕方の八時前にセンターに着き、小ホールに入ると、七十名の人たちがすでに座っていた。ボクたちが椅子に腰かけると同時に、説明会がはじまった。

まず、このプロジェクトを推し進めているセンター長が、今までの経過を話し出したあと、「来年の秋にはグループホームをオープンするので、それまで親と専門指導者がよく話し合って、より良いものをつくっていききたい」とのべたのだ。

センター側と親との質疑応答の時間となっていた。ボクの知っている人やママたちはいくつかの要望を出した。とくに、ママは、「地域の人たちと共に仲よく暮らしていけて、安心できる居場所となるような、そんなグループホームにしてほしいのです」と希望をのべたのだ。

二時間の話し合いのなかで、パパがとくに耳を澄ましたことがあったのだ。それは、七十歳のある母親が三十八歳の娘について語った内容だった。

「わたしの娘は五年前に、隣の街のグループホームで月曜から金曜日まで暮らすようになりました。最初の一年間は、土曜に自宅に帰り、日曜の夕方にホームに戻るのを娘は嫌がっていました。しかし、父親が病身なのを見て、自分はホームで暮らさねばならないとわかったのです。」

娘は今ではホームに戻るときは、『また来るね』と私たち親に笑顔で言うようになりました。これも娘の自立の一つなのです。

三十八歳の娘が『ミニスカートをはきたい』と希望すれば、以前のように、そんなものを身につけてとは言わずに、それを受け入れる親に、今はなっています。娘の思いを尊重し、認めています。

娘が自立するようになれば、親も自立します」

これを聴いたパパは、その母親から勇気と希望をもらったようになったのだ。ボクがママとパパから離れて、そろそろ自立する方向へ進んでいるのを感じはじめたようだった。センターを出てから家へ帰る途中、ママが車のなかでパパに言ったのだ。

「何組もの家族が来て、討論に熱が入ったし、それに街の議員と行政官も出席していたわね。いい時間だったわ」

「そうだったね。皆の話しを聴きながら、ミヒヤエルの自立とは何なのかを、考えさせられたよ。でも」

そう応えてから、パパは続けたのだ。

「ミヒヤエルと二十七年間いつも一緒に暮らし、その彼が家にいなくなったら、風船に針が刺さって空気が次第に抜けていくような気持ちになるかも知れないな」

「それは、わたしも同じよ。でも、週末は家に戻ってくるし、彼はいつまでもあなたの子供なのよ」

ママがそう言うのと、パパはボクのほうに顔を向けてにっこりした。

それから半年して、家から歩いて十五分ほど行ったところに建っている三階建ての一般向きアパートの一角に、ボクは住むようになったのだ。

ボクは一階で、五十七歳と二十四歳の人と一緒だ。二階には女性の仲間たちが三人。三階には男性の仲間三人が暮らしているのだ。計九名のグループホームなのだ。

ボクの部屋は十五平米の広さ。そのなかに、ベッドとソファ、それにタンスと机も並んでいるのだ。それらは、パパとママとボクとで家具屋で選んだものばかりだ。赤色系統が好きなボクなので、ソファとかけ布団の色は赤、カーテンも淡い赤なのだ。同居している二人とも、自分好みの家具を部屋に持ち込んでいた。

住いにはトイレが二つあって、広い居間とキッチンが一緒になっているのだ。

庭にはママや他のママたちが植えた花が咲き、垣根の向こうには、ゆつくりと車が走っていて、どんな乗り物でも好きなボクは、それらの車を飽きもせずに見たりすることがで



きるのだ。

ママとパパが話をしていた。

「街の中心地に建っているグループホームなので、近くにはパン屋や肉屋や花屋やピザ店や中華料理店、それに歩いて二分行ったところにはスーパーマーケットも薬局も銀行もあるわ」

「日常の生活に必要なものは何でも揃うな」

「立地条件のいいところよね」

ボクがここで月曜から金曜日まで暮らしはじめた頃、パパとママと二十七年間一緒に住んでいたの、ここでの生活になかなか慣れ親しむことができなかったのだ。

ボクは、自分の意思をことばでなかなか表現できないので、このホームに移り住んだ最初の数ヶ月間、時々真夜中に起きては自分の部屋の電灯を朝まで点けっぱなしにした、居間の椅子をひっくり返したりもした。

それに土曜日に家に帰り、日曜の夕方にグループホームへ戻る時、ホームの手前百メートルまで来ると、ボクの足は自然と止まり、動かなかったことが何度もあったのだ。そのような時、ボクと一緒に歩いているママがパパに、

「待つよ」

と、言うのだった。

週日は、ボクが家にいないので、パパはボクとキッチンでの調理をすることができない。それに食事をボクと一緒に摂れないので、フォークとナイフが止まったりもしたのだ。

それを見たママが、パパに言うのだった。

「彼の自立のためよ。あなたがそのような気持ちでいると、それが彼に伝わって自立していかないわよ」

「それはわかるけど、寂しいものはさびしい。風船に穴が空いて、萎んだような心境になってしまうのだ」

そう応えたパパだった。

そのような日々から数ヶ月が経った頃、ボク自身に新しい変化が生じてきたのだ。

それは、土曜日に家に戻ると、ボクの同居人とボクたちをお世話してくれる人たちの名前を、パパとママによく言うようになり、その時は、ボクは上機嫌なのだ。今までそのようなことはなかったのに。

また日曜の夕方にグループホームに戻る時も、以前のように足は止まることもなく、テンポがより速くなってホームへ行くようにもなった。ホームでの暮らしが楽しくなってきたからだった。

作業所から戻る四時半以後は、ボクたちを世話してくれる人たちと一緒にゲームをしたり、スポーツなどもするし、それに木曜日の午後には、いつもパパがホームに来て、一緒に買物に出かけたりもするのだ。

それに九人の仲間のひとりが誕生日になると、皆が集まり、一緒にテーブルを囲んでケーキやジュースを飲んだりもする。その他にも、年に二回ほど近くに住んでいる人たちを呼んで、パーティもあるし、学生ボランティアもよく来てくれるし、とにかく楽しく、退屈しないのだ。

## 第十八章 三十回目の誕生日

グループホームで暮らして一年が経ち、三十歳の誕生日を向かえたボク。

八名の仲間たちとボクたちをお世話してくれる八名、それにボクのおじさんやおばさん家族、それにボクを知っている人たち合計四十人近くを招くことになったのだ。

そうになると、家に全員を呼ぶことは難しいとママは考え、もっと広いところのことになったのだ。その場所は、街のマルクト広場に面した教会のゲマインデハウス（教区信徒会館）の小ホールだ。

パパとママ、それにボクは誕生日の準備に取りかかり、招待した人たちが来たのは、日が暮れかけた六時過ぎだった。

夕食の支度は、ママが二日前から、この地方の郷土料理マウルタアシュを家で作っていたので、それを暖めるだけでよかった。サラダと食後のケーキは、参加者が持つてくることになっていた。

皆が集まったところで、ママがボクのおじさんやおばさんや従兄弟、それと、グループホームの一人ひとり、それにボクたちをお世話している人たちを紹介したのだ。

少しすると、パパが壁に映し出されたスライドの画像を見ながら、ボクが生まれた浜松や六年間暮らした土浦の日々や、ボクが十九歳の時に、パパと二人だけでリュックを背負って十八日間日本を旅したこと、それに毎年の夏にはアルプスの山々を登っていることなどを皆に語り、ボクが山道を一日十キロメートルは歩き、それを一週間も続けていたとパパが話すと、皆驚きの声を上げたのだ。

それが終わると、ママが作った料理と、何人かが持ってきたサラダを食べての夕食となったのだ。

それらを食べ出すと、グループホームで世話をしている人が、ここ一年間のボクの生活ぶりを撮ったビデオフィルムを、壁に映し出したのだ。皆真剣に観ていた。

それが済むと、こんは全員で歌を唄ったり、ゲームをしたりしたりの時間となった。ボクは絶えずにこにこ顔で、各テーブルを回り、誇らし気に、皆からもらった贈り物を披露したのだ。

最後は、全員でボクのために歌を唄い、それもアンコールとなった。ボクはうれしくてうれしくて、両手を上げて「やった！」とのポーズをしたのだ。

それを見たパパとママは、微笑みながら両手を打ち合わせ、皆も同様に拍手したのだった。皆に見守られて、ボクはうれしかった。

ボクの傍にいたママが、パパに言ったのだ。

「彼、ホームにだいぶ慣れてきたわね」

「そうだね」

「すこしずつ自立してきているわね」

それを聴いたパパは、黙っていた。

## 第十九章 ボクの小指一本が

三十歳の誕生日から一年が経った時だった。ボクに一つの事件が生じたのだ。それは、パパが日本に行っている間に起こったのだった。

夜の十一時過ぎ、グループホームで眠っていると、ボクが働いている作業所で見たとのことある背の高い人が、部屋にノックもしないで入ってきて、眠っているボクを起こし、急に顔を殴ったり、爪でボクの顔を何ヶ所も引っ掻いたりしたのだ。それに加え、右手小指を骨折する暴力をうけたのだった。

ボクは何がなんだかわからず、すこしは抵抗したが、なされるままにしていた。

その人は、グループホームの三階に住む友だちの部屋を訪れ、夜遅くまでいて、十二時を過ぎても両親の家に帰らなかったの、学生アルバイトの人から、

「家に、帰るように！」

と言われたので、カッとなって、友だちの部屋を出て、一階のボクの部屋に来て、意味もなく暴力を奮ったのだ。

グループホームには、夜の九時以後は、ボクたちを世話する人はいないし、もちろん、当直者もないのだ。ただ、アルバイトの学生二名が同じアパートの独自の部屋に住み、夜中の十二時と四時の二回だけボクたちの部屋を見回っているだけなのだ。そのうちの一人が、ボクの傷ついた顔を見て、救急車を呼んだのだった。

大学病院に運ばれたボクだった。少しすると、ママが家から駆けつけてくれて、ボクの左目周辺が青く腫れ上がったのを見てびっくりして抱きしめてくれた。

警察官と学生アルバイトの人から、ママはその時の状況について耳を傾け続けた。そのあと、ママと一緒に家に戻り、朝を迎えたボクだった。

ちょうどこの時、パパは日本にいたので、ボクに何が起こったかを知らなかったのだ。そのパパに、ママが電話で、ボクが暴力をうけたことを話したら、パパはあと二週間の日本滞在を取りやめて、直ぐに家に戻ってきたのだ。

パパは家に帰るや、ボクの骨折した指と腫れ上がった顔を優しく撫でてくれた。ボクはにつこりだ。傍にいたママがパパに、

「三週間ほど、グループホームではなく、家にいることになったわよ」

と言うと、パパは大きく肯いたのだった。

翌日、パパは、ホームの職員であるフェーシングさんから詳しい事情を説明してもらったのだが、なぜこのようなことが、生じたかを知ることができないでいた。

それから二週間して、パパはフェーシングさんに、

「二十三歳の青年、それに彼の親からも何の謝りのことばもないので、その青年及び彼の両親と話がしたい」

と、申し入れたのだ。

四日後の夕方、パパ、ママ、フェーシングさん、それに彼と、彼の両親との話し合

いが持たれたのだ。再びその人と会いたくなかったので、ボクは行かなかった。

一時間半の話し合いのあと、家に戻ってきたパパとママ。その二人は、コーヒを飲みながら話し合っていた。

「なぜ暴力を奮ったかを、彼に直接訊いたが、自分ではわからないと返事をしたね」

「そうね。彼の父親が、高血圧の息子は精神病の薬を飲んでいて、よくカッとなると話してくれたけど」

「彼は、数回警察沙汰になるような暴力を奮ったことがあるのだね。注意人物だと警察官には、知られているらしいね」

「そうね。親も大変だと思うわ」

「父親は赤ら顔をして、アル中らしい話し方だったな。母親は一言二言のべたあとは、ずっと黙り続けていたし、病身のように見えたよ」

「かもしれないわ」

「フェーシングさんが彼に、『ミヒヤエルに謝ったほうがいいよ』と勧めたけれど、彼は黙り続けていたね。と、父親が『謝ったほうがいいぞ』と声を出したら、彼は、『お詫びします』と私たちに言ったよね」

「そのほうが、二人にとっていいわよ。これから、作業所で会ったりするのだから」

「最後に、きみが、『半年したら、再び会いましょうよ』と言ったら、彼は肯いていたね。フェーシングさんも、それはいい案だと賛成したし」

「あなたは、彼にセラピーを勧めたけど、フェーシングさんが、『知的発達遅滞があって、なお且つ精神病に罹っている人の場合、セラピーは難しいところもある』と言ったわね。とにかく、彼は一年間ミヒヤエルが暮らしているグループホームに来てはいけないことになったけれど」

「そうだったね。幸いなことに、ミヒヤエルは、何ごとも引きずらない性格なので助かるよ」

「でも、気持ちの切り替えが難しいところもあるので、気をつけていきましょう」

この事件のことは、時が経つにつれて忘れてしまったボクだった。とにかく、ボクはボクなりに、グループホームで暮らしているのだから。

## 第二十章 皆の前で語るパパ

ボクがグループホームで生活すようになって、四年が過ぎた時だった。パパが以前働いていた土浦の施設長から、

「息子さんが暮らしているグループホームについて、職員の前で話してくれませんか」と頼まれて、パパはよろこんで日本へ行ったのだ。

二週間の日本滞在を終えてから、家に戻ってきたあと、パパは皆の前で語った内容を、自分が発行しているテュービンゲン便りに載せたのだ。

ボクはこの便りの発行の際、切手を貼ったり、スタンプを押したりすることをいつも手

伝っているのだ。

【息子のミヒヤエルは、グループホームで月曜から金曜日まで暮らし、土曜日の昼になると家に帰り、日曜の夕方になると、歩いて十五分のホームへ行く日々となりました。

グループホームで生活しはじめた半年間は、日曜の夕方になってホームが近くなると、彼の足は止まり、前へ進まないことが何度もありました。

しかし、半年が過ぎた頃になると、足取りは軽く、テンポも速くなってにこにこしながら、うれしそうに行くようになったのです。

その姿を目にして、グループホームで楽しく暮らしているのがわかったのです。一体、何がそうさせるようになったのだろうかと考えました。

彼は、はじめの半年間一緒に住む同僚の名前と、世話をしている人の名前をめったに口に出さなかったのですが、しばらくすると言うようになったのです。その時の顔は、いかにもうれしそうなのです。それを見て、またひとつ学んだようになりました。

一般に自立というと、身辺自立、経済的自立、職業的自立となりますが、それだけではない自立もあることに気づいたのです。

彼の住居には、あと二人の同居人がいます。三人の知的能力はさまざまで、年齢も異なっています。その三人が一緒に暮らす姿に、『共生』という語が当てはまると思っただけです。

知的程度が異なり、年齢の違う三人が共に暮らすには、お互い許し合い、支え合うという寛容の気持ちが必要でしょう。そうしたなかで、ミヒヤエルは同居人と世話をしている人に積極的に働きかけて、関係を築いていたのです。

仲間との繋がりのなかで、楽しく暮らしている息子の姿から、人は共に生きることによって、よろこびを味わえるのだと思っただけです。他者との関係を持つことが、彼の自立だと知ったのでした。

彼の場合、身辺自立や目に見える自立は未だできていません。しかし、他者との関係を持つことで心が安定し、今では家よりもグループホームでの暮らしに、よろこびを見つけられているように思えたのです。

日本でもドイツでも介護保険があります。しかし、ドイツでは介護を要するなら、高齢者だけに限らず、彼らにも、介護保険が適用されます。

と同様に、介護をしている人が、年金をもらう年齢になったら、介護保険から年金を得ることが出来るのです。つまり、介護が仕事と見なされているからです。その恩恵を、自分も享受しています。

それに息子が暮らしているグループホームにかかる費用約三十数万円は、全て公から出ているので、親の負担はまったくありません。それと、夏や冬の長期に、グループでどこかに行く費用は、介護保険から出ます。

それら全て、ホームの財源となる金額は全てガラス張りとなっていて、息子本人の口座手帳に支払われ、それを親が管理しているのです。ですから、親の責任と役割は、以前と同様に大きいものがあります。でも、それがプラスとなっているのです。

また親が亡くなったあとの法的な手続きとして後見人制度もあって、息子の場合、きょうだいがいままので、妻の姪がそれを引き受けてくれることになっています。

余談になりますが、今回の日本滞在中、わたしが生まれ育った東京、それにいくつか

の地を訪れ、毎日様々な人たちと会い、若い人たちとも語り合う機会がありました。その際、あることが気になったのです。それは、『個』ということでした。

わたし自身、長い間ドイツの社会で暮らしているので、この個を深く意識しながら生活しているし、妻がドイツ人なこともあってか、多くのドイツ人とコンタクトを持っています。そのような状況下にありますと、自分は何もので、自分はどこに立ち、どういう役割と目標を持って歩いて行くのかとの、アイデンティティを深く考えるようになったのです。環境から主体へ、主体から環境へとの交互作用を通して、自分の心を豊かにしようとしたのです。

だれでもどのような人にも、その人独自の存在があつて、それは他の人が決して代わることはできません。そのことを自覚すればするほど、毎日の日常生活のなかで自然とよろこびが湧いてくるものです。よろこびは、自分自身に近づけば近づくほど大きくなります。

今のドイツの民主主義の礎になっているのは、人権を個の権利として尊重しているからで、そこには自立という、『自己実現へ向けて、主体的に生き、実践をする』との考えが軸にあります。

また実践をするからには、いくつかの選択肢から自分で判断し、責任を引き受け、多少の冒険も伴うなかで、行動することにもなります。それだからこそ、身も震えるようなよろこびを肌で感じ取ることができるのです。今の状況下で、尻込みをしないで生きていくことは大切です。

わたしは今も主夫をしながら、それを体験しています。それに自分の『個』を大切にしながら暮らしていくと、他者の『個』をも大切にするようになるのです。多分、そこには、苦しみや悲しみの人間的共感が存在するからだと思うのです。

さらに、考えたことがありました。

それは、日本では至るところモノと情報が溢れ、過剰気味だったことです。そうしたなかで、自分で選択し、自分にあったものを判断するのは大変なことです。人の不幸は欠乏から生じるのではなく、過剰によつて起こるのではないかと思つたほどです。それに携帯やスマホを歩きながら、電車のなかでも操作しているのを目にしていると、これで果たしていいのだろうか、人との真の触れ合いができるのだろうか、人間は社会的存在だし、これで触れ合いのある社会となっていくのだろうか、人との関係を浅く広くとはなっても深くはなれずに、自分の心の内をこの触れ合いのなかで表現していけるのだろうかと思つたのです。

わたしの家族は携帯もスマホもない暮らしをしているから、そのような考えに至つたのかも知れませんが。

もう一つ、考え続けたことがありました。

それは、若者たちのなかで、数が多いとは言えないでしょうが、暮らしのなかで、自分の役割と目標を見つけてないように思えたのです。自分独自の『個』を、表現してないように見えたのです。ドイツに住んでいる男女の青年とは、違うように映つたのでした。いつもまわりを、また見られる自分を気にして、自分の考えを表現してないように思えたのです。

そのような青年、とくに、男性に言えることは、生育する過程で、家庭での父親の

存在意義を感じ取っていなかったからではないでしょうか。

日本の父親は、家庭のなかで自分の存在意味をしっかりと捉え、それにパートナーシップをしっかりと築き上げる必要があると思ったのです。

親同士が仲良くハッピーなら、子供も幸せを感じ、自分の将来に肯定的なものを見出すのではないのでしょうか。

女性と子供が、伸びやかに穏やかに暮らしていくためにも、父親のしっかりした意識が大切です。

それに日本では地域創生、少子化問題、女性の地位向上の問題などが問われていますが、そのどれにも関係しているのが男性の意識変革だと思います。

男性、および父親が家庭生活のなかで、地域生活のなかで、居心地良い場を創っていけば、女性と子供が暮らし易い社会となるのではないのでしょうか。

働いてお金と地位を得ても、それがその人の幸せになっているのかどうか。『もっと、もっと』という思いになるのではないのでしょうか。

わたしはそれよりも、その人の独自の存在が「在る」ということに生きる意味があると考えます。一人ひとりが生きるなかで、苦しみや悲しみを共感し合うためにも、『個』を自覚することが大切だと思います。多様性のある社会を築いていくためにも、必要だと思うのです。

そのような考えを持つ男性が多くなっていくためにも、国や政治家は人間を長時間働かせないシステムや社会保障制度を充実させてほしいのです。

わたしは、ダウン症の子と暮らしています。そのなかで、今も常に思っている自分なりの思いがあるのです。それは、短いことばで言えば、『小さなよろこび、大きな幸せ』です。

身近に体験していることに、何らかの意味を見つけ出し、それに感謝の心を持てば、それが幸せとなると信じているのです。

また息子の笑顔一つで、私は幸せになれるのです。そのことを自分の心に刻みながら、暮しています。それは、今後変わらないでしょう。

最後になりましたが、本来、福祉の仕事は楽しいものです。なぜならば、人を助けるために働くことができるからです。その過程のなかで、助けられている自分を見出すことができるからです。

あと、福祉に携わる人たちは、既成の在り方に疑問を持ち、批判する精神を養うことも大切で、それを表現する勇氣を持つてほしいと思っただけでした。それと、どんなに小さな目標でもいいから、それに向って進んでほしいのです。

三十七年間日本で暮らしていた私だったので、祖国に戻ると、その社会が気になるのです】

## 第二十一章 寄り添ってくれるママたち

パパのところと一年間に、日本から数名の人たちが訪ねてくるのだ。そうすると、ボクはその人たちと一緒に食事をしたり、どこかへ行ったりもするのだった。もちろん、ボクが住んでいるグループホームにも来てもらうのだ。

二年前の夏だった。ある女の人が、パパとママが住んでいる家で五週間滞在したことがあった。ちょうどボクが、仲間と一緒に二週間のギリシャ旅行をしている時だった。

ボクが旅行から家に戻ると、その人はボクの部屋にいたので、居間のソファアをベッド替わりにして寝ることになったボクだった。その間、その人と一緒に過ごして楽しかったことを憶えている。

満足した顔でその人は、ボクたちと別れ、次のところへ向ったのだ。

翌日、パパとママとが居間のテーブルを囲んで話をしていた。夏休みがまだ続いていたので、ボクはテーブルの片すみでジクソーパズル遊びをしていた。

「日本から来たあの女学生、もうすでにある種の国家認定の資格を持っていると、誇った様子もなく語ったわね」

「そうだったね。大学に通いながら、よく取得したと思うよ。まだ二十歳そこそこだよ。たいしたもんだね。一般の人とは違う、知能指数が高いを感じたよ。それも、脳のある一部が、とくに、優れているように思えたね」

「わたしも、そう感じたわ」

「家に来たとき、彼女は、『自分はアスペルガー症候群です』と言ったよね。そのあと、手首の深い傷跡をみせながら、自分は自殺をしたと顔の表情も変えずに淡々と言ったのは驚いたよ。痛みはまったく無かったとも語ったね」

「そうだったわね」

「彼女と話をしていると、会話が何か噛み合わなかったところがしばしばあったよ。彼女は、聞いている相手の気持ちを察することができないようにも映ったね。ひたすら、自分が思っていることを一方的に話しているようにも見えたよ」

「自分に素直に語っていたのでは？」

「それが、良いか悪いかを別にしてね。とにかく、こちらの言うことを理解しようとする力が、彼女にはあまりなかったと思うね。それに社会に適応が難しいようにも映ったよ」

「そうだったかしら？」

「きみには、彼女が話したことをドイツ語で伝えていたが、訳しづらかったところがしばしばあったよ。多分、彼女は聞く側になって話しをせず、相手の言うことに耳をそう傾けなかったようにも映ったよ。急に話がとぶこともあったし。そのようなことで、コミュニケーションがスムーズにいかなかったところもあったように思うのだ」

「自分の存在をあるがままに出しているのよ。あなたが困惑を感じたら、それはあなたの問題よ」

「そうかもしれないな。ミヒヤエルが今しているパズルとか、絵合わせゲームを彼女と一緒にすると、ものすごく強かったね。特別な能力を感じたよ」

「そうね。その能力を磨いていけばいいわね」

「それにはまわりの人たち、とくに、家庭で彼女の存在を親や兄弟たちが見守り、後押しをすることが大切だろうな」

「そのことは、私たち親にも言えるわね。まず、親がわが子のマイナス的なこともプラス



的なことも認め、受け入れることよね」

「きみの言う通りだ」

「私たちはアスペルガー症候群ということばを知らなかったわね。彼女が私たちの家に来る前、母親があなた宛に長い手紙を送り、そのなかで私たちは、初めてそのことばを知ったわよね」

「その長い文の手紙のなかで、娘が半年間ドイツのフライブルク・テュービンゲン・ハイデルベルクでドイツ語を学びたいとの趣旨が書かれてあったね。娘の希望をぜひ叶えさせてあげたいとも記されていたよ」

「わたし自身、アスペルガー症候群（広汎性発達に支障・高度の自閉症）の人と接するのは初めてだったので、家に滞在してどうなるかと心配したわ。でも、あなたが彼女のお母さんが書いた手紙を、一言も洩らさずわたしに伝えてくれたことがよかったわ。昔、トイライブラリーで、親たちと話したりしているうちに、お互い共感しあい、支える気持ちがより増してきたことがあったわね」

「そうだったね。その親たちと今も年賀状などで連絡を取り合っているよ。日本に行ったとき、会ったりもしているからね。当時を思い出すと、おもちゃを通して子供たちと遊び、コミュニケーションをとろうとしたよね。それに彼らが居心地のよい場、くつろげる場となるようにと、親たちともよく話し合ったりしたよね」

「そうだったわね」

「彼女が家に滞在するようになって数日後、母親と二回ほど電話で会話をして、さらに、よくわかったことがあったよ」

「何が？」

「娘の願いを叶えさせてあげようとするには、相当な勇気が必要だったことをね。たしかに、彼女とのコミュニケーションには、ちぐはぐさはあったが、娘のより優れた特性を生かそうとしていた母親だと思ったね。あるがままの娘受け入れ、あなたは今のそのままでいいから、その思いで外国へ行ってらしゃいと言ったものを感じたよ。あるがままのなかで、娘に幸せを体験させたいと願っている母親の姿だと思ったね。勇気がないとできないことだよ。と同時に、娘自身にも勇気がないと外国に半年に亘って滞在できないだろうし」

「そうね」

「真摯に、真剣に生きていこうとする娘に寄り添う母親だと思ったよ」

「親と子が、お互いに認め合っている姿とも言えるでしょうね」

「彼女は、『ミヒヤエルさんの気持ちがよくわかる』と何度もいったね」

「ええ、そうだったわね。何か共感するものがあったのかしら？」

「よくわからないけれど、二人とも感受性はより強いね。ミヒヤエルの場合、人の動作などをよく見ていて、物まねがうまいよね。彼女の場合、絵合わせゲームなどの視覚的記憶力は抜群だったね。反対に、二人とも耳から入ったことを理解する力は弱いね。そこに共通点があるかもしれないな」

「そうだったわね」

「とにかく、相手の気持ちをそうおしはからないで、自分が相手に承認されようがされまいが話す彼女。自分を素直に出しているのだろうな。相手がいてこそ、自分の存在を知っている自分とはすこし違うな」

「あなたは、とくにそうね」

「とにかく、親として、私たちは、わが子が暮らし易いように行動しているが、大切なことは、わが子が何を必要として、どんな支援ができるかを知らうとすることだよ。愛情の強さのあまり、子を理解しない親もいるだろうし。親というのは、何か、弱い立場の存在のようにも思えるのだよ」

「そうね。でも、そうだからこそ、そのなかで生じるよろこびも一層大きくなるわね」

「実際、ミヒヤエルを通したり、また社会のなかでなかなか適応することができない人たちを通して、私たちは生かされていることを知るし、救われているのを年齢とともに感じたりするよね。まわりにいる困った人を世話したり、援助したりしていると、こちらが彼らから力をもらい、生き生きとした気持ちにさせてくれるから不思議だね」

「そうね。家族が果たす役割は大きいわ」

「家族と共に生きる社会はいいね。安心した気持ちとなるからね。ミヒヤエルと暮らしていると、ありがたさを感じるよ」

「それは、たしかに言えるわ。お互いが支えあっているからでしょうね。そういえば、以前あなたを頼って、癲癇の発作をもった人が日本からひとりで訪れてきて、テュービンゲンに八ヶ月間滞在したことがあったわね」

「ああ、わたしより一歳年上の人だったね。私たちの家に二週間過ごしたあと、歩いて数分行ったところにあった、きみの知人宅の貸し部屋でしばらく暮らしていたよね。夕食は、大体私たちと一緒に摂っていたけれど」

「夏の休暇も、私たち家族と一緒に過ごしたわね」

「そうだったね。テュービンゲンに滞在中、彼は何回も発作を起こしたね。ネッカー橋の上で二回ほど意識がなくなっただ学病院に運ばれたり、自転車に乗っていた際、交差点のところで他の自転車とぶつかって救急車で運ばれたりもしたよね。病院で意識が戻ってもドイツ語がそうできなかった彼だったので、自分で説明するのに苦労していたね。わたしたちが病院へ迎えにいくと、ホッとした表情を浮かべていたからね。癲癇発作の身で、あこがれのドイツにしばらく住みたく、やって来た人だったね。東京の山谷で暮らすホームレスの人たちに、数年間奉仕活動をしていた時期もあったとも語ったよね。困った人を助けようとする熱意に、頭が下がったよ」

「人は、困った人に援助するようにできているのよ」

「そうだろうな。とにかく、彼の勇氣と強い意思がこちらに來させたのだろうな。八ヶ月間の滞在中に、日本から老いた母親が二回ほど訪ねてきたよね。わが子を見守る姿に、胸が打たれたよ」

「それは、わたしも同じだったわ。彼、無口な人だったけれど、よく笑顔を見せていたわ」  
「そうだね。彼が日本に帰った翌年、ミヒヤエルと二人で日本を旅したときに、彼の住んでいる九州の家にも寄ったことがあったよ。その際、ご両親から大歓迎されたね。そのご両親から、数年前わが子が他界したとの知らせが入ったね」

「そのことは、あなたから聞いたわ」

「とにかく、彼は自分に正直に、誠実に自分の生を、生き抜いた人だったと思うよ」

「そう言えるわね」

「ダウン症の人を、アスペルガー症候群の人を、癲癇発作がある人を、変な目で見るので

なく、一人ひとり尊い命を有す特徴のあるキャラクターを持つ人だと捉えるべきだね。人は、だれでも自分の人生のなかでは主人公だし」

「そうよね」

「その人を、あるがままに受け入れ、その人に寄り添い、その人に、『そのままの姿で暮らし、あなたのそのままの姿で生きていけばいいのですよ。そのなかで幸せを見つけてください』と声を大にして言いたいよ」

「わたしもよ。多様性を認め合い、個性を認め合うことね」

「ダウン症の子を持つ父親として思うのだ。彼が安心して、落ち着いて暮していけるような居場所をつくり、まわりの人たちと共に幸せを見つけていけば、それが豊かな社会となっていくのだ」

「同感だわ」

## 第二十二章 パパたちの祈り

ボクたち三人がカレーライスを食べている時だった。

「そとでは雨が降っているけれど、明日は、ぜひ晴れてほしいわ」

「天気予報では、明日も雨らしいが、毎年いつも晴れるので、雨は降らないよ」

「そうね」

二人の会話を耳にしながら、大好きなカレーライスを食べていたボクだった。

夕食が終わったあと、いつものようにキッチンで後片付けをはじめたパパとボク。

それが済んでから居間に戻ると、ママが白く長い幕の前に座って、日本から持ってきた青色の布にはさみを入れていた。

パパはママのところに行き、青い布から切り取ったいくつかの文字を、白い幕に縫いはじめたのだ。ボクには難しいので手伝いはしなかった。二人の手をじっと見ていただけだった。そのボクに、ママが言った。

「もう十時が過ぎたので、ベッドに入りなさい」

肯いたボクだった。

次の朝、ボクは起き出してからカーテンを引くと、パパが言った通り、昨日まで降っていた雨は止んでいた。

朝食を摂り出したボクたち。昨夜遅くベッドに入ったのだろう、パパとママは眠り足りなさそうな顔でパンを食べていた。それも終り、一緒に外に出たのだ。

パパとママは、風船を飛ばす道具と折り紙、それに印刷された紙などを持って、近くの教会前広場へ歩き出したのだ。ボクも、一緒だ。

毎年のこの日、パパとママと一緒にこの広場に来るボクだ。日本からドイツに移り住んで数年してから、それはずっと続いているのだ。パパはこの日に、深い思い入れがあるのだ。ドイツから広島原爆記念館を、二回ほど訪れているパパなのだから。

広場前に着くと、パパとママの活動に関心を持った二組の日本人家族と平和運動をして

いる数名のドイツ人が、ボクたちを待っていた。その人たちと一緒に、前に建つ大きな教会堂から机や椅子を運ぶことをはじめたのだ。

それがちょうど終わった時、十時を知らせる鐘の音が、教会の塔から「カーン、カーン」と鳴り響き出した。と同時に、パパが皆に、

「さあ、これから一時まで、折り紙で鶴を折って、それを道行く人たちに手渡して、世界平和を願う活動をするのだ」と、声を上げた。

ボクたちの横には、パパが広島の平和記念館啓発担当室で手に入れた、何枚もの大きなポスターがパネルに貼ってあった。その脇には、パパとママが昨夜作った横長い幕が垂れ下がっていた。それを眺めていると、ボクが字を読めないのを知っているママが、

「あの長さ三メートルほどの横断幕には、『八月六日の今日は、広島に原爆が投下された』と記されているのよ」

と、教えてくれた。その前で、日本人家族とドイツ人数名と一緒に椅子に座り、鶴を折り出しはじめたのだ。

ボクは、パパが数日前に書き記したビラを、何枚も手に持って通りで歩いている人たちに配り出したのだった。そこに記された内容について、ママがパパに訊いた時、パパは次のように答えたのだ。

「原爆が落とされた被害者の立場からの見方だけではなく、なぜ、原爆が落とされるに至ったかを綴ったよ。それと、ドイツは世界のなかで、アメリカ、ロシアについての武器輸出国なので、それをストップしなければならないとも書いたね。それをしっかりと見つめていくことが、未来に戦争のない平和な世界を、創り出すことになると思ったからなのだ」昨日の新聞に、パパたちの活動が記事に載り、それを読んだ多くの人たちが、ママたちに話しかけたりしていた。

近くのマルクト広場では、朝市が立っていたので、ボクたちの前を横切る人も大勢いて、それに夏休みだったので子供を連れた家族が、赤・青・黄色の風船を見て、寄ってくるのだった。

パパやママたちはドイツ人に鶴の折り方を教えたりしていた。ボクたちのまわりは、とても賑やかだ。

十一時と十二時になると、教会の鐘が鳴り響いた。と、その音に合わせて、全員が椅子から立ち上がり、パパが「黙祷しよう」と言ったので、ボクは皆と同じように目を瞑ったのだ。

最後に、参加した人たち十二名が手に風船を持って、一斉にそれを空へ向けて放すと、色とりどりの風船は、空に吸い込まれるようにして舞い上がっていったのだ。

風船の下には、昨日ママとパパが書いた小片が付いていた。

- ・広島や長崎のようなことを、世界のなかで再び繰り返さないようにしなければならない。
- ・戦争が終わって、市民の苦しみがはじまる。
- ・核兵器の無い世界を求めて。

舞い上がったそれらの風船を見ながら、パパたちが、

「響け、私たちの願い！ 世界の人たちが幸せでいられるように！」

と、声を上げたのだ。

少ししてから、後片付けをはじめたボクたち。そのあと、皆と一緒にボクの家へ行き、ママが作った昼食となったのだ。

テーブルを囲んで食べていたボクたちのなかには、机や椅子を運んだり、片づけをしたり、風船にガスを注入していた日本人の中学生もいた。

お皿に盛ったサラダとチーズとソーセージ、それにピザを食べていると、パパが皆に言った。

「一九六七年、日本政府が公表した非核三原則、『核兵器をもたず、つくらず、もちこませず』を、今も国是としている私たち日本人だ。戦争を避けるためにも、広島と長崎に落ちた原爆のことを、さらに、世界に伝えていかねばならない。あのような悲惨なことを、再び起こしてはならない。それと同様に、日本が戦争に突入したという加害者体験も、しっかりと伝えていかねばならない。そうしないと、お互い真の信頼関係が構築できないからだ」

皆、肯きながら聴いていた。

ボクは皆から、「ビラを歩いている人たちに、百枚以上手渡してくれて、ごころうさん」とのことばをもらったのだ。ボクはにこにこ顔になって、自分でも手をたたいたのだった。

二時間の昼食を終えてから、皆それぞれの家に戻っていった。

そのあと、居間のソファアーに腰掛けたパパとママ。ボクは、好きなパズル合わせだ。パパとママは、コーヒーを飲みながら話していた。

「今回、日本の中学生がいて、よくやってくれたね。若い人に、このような活動をしながら、世界平和を伝えることができたことが、とてもうれしかったよ。次の世代に、広島と長崎に投下された原爆を、どうしても語り継いでいきたいね。世界に核戦争を起こさないためにも。世界に戦争の恐ろしさを、知らせるためにも」

「そうね。それは、大切なことよ」

そう応えてから、またコーヒーを一口飲んだママだった。そのママに、パパが言った。「今年も、ミヒヤエルは、にこやかな顔で、一緒に行動してくれたね」

「彼は、どこまで理解しているかわからないけれど、笑顔でビラを多くの人たちに手渡していたわね。彼のような笑顔を全ての人が持てれば、世界が平和になるでしょうに」

それを聴いたパパが、話し出したのだ。

「今まで広島に二回行き、その度に、人間一人ひとりの尊厳と命の重さをひしひしと感じたね。亡くなった人たちのことを、思ったよ」

「その広島へ、わたしは行ってはいけないけど、思いは同じよ」

そう応えたあと、ママはソファアーから立ち上がり、テーブル上でパズル合わせをしていたボクの傍に寄ってきて、ボクがなかなかできないでいたところを見ていた。

次の朝、新聞を読み終えたパパがママに言ったのだ。

「昨日の私たちの活動が、『広島からの訴え』という見出しで、カラー写真入りで新聞に大きく載っていたよ。ミヒヤエルも映っていたな」

「そうなの」

その記事を読み出したママ。そのあと、ママが言った。

「いつか、わたしも広島を訪れてみたいわ」

肯いたパパだった。

## 第二十三章 ママの願いが叶う

ボクが三十九才の誕生日を迎えた時だった。パパがママに、「三人で日本へ行こう」と言った。それを聴いたママは、とてもよろこんだ。ボクもだ。その日が来るのを、ボクたちは待ち続けた。

パパは二週間に必要なものが入った大きなリュックサックを背負い、ママは旅行かばんを持って、ボクは小さなリュックを手にして家を出た。

長い時間、飛行機に揺られたあと、関西空港に着いたボクたち。

荷物検査場を出ると、見たことがある人がボクたちの前に立っていた。その人は、パパの学生時代の山仲間で、昨年の夏、チュービンゲンに来て、ボクたち家族と何回も一緒に食事をしたことがあったのだ。

またパパはその人と一緒に車でイタリアの南チロルへ行き、山々を一週間も歩き廻ったりしてもいた。その時に撮った写真を、ボクは観たことがあった。

ボクたちは、その人の車に乗り、飛行場をあとにして、その人の家に行き、一時間ほどお茶を飲んでから、その人がママに見せたかった大阪城へ車で向ったのだ。

車のなかで、ママがその人に話しかけたのだ。

「わたしとミヒヤエルはドイツ人なので、外国人向け用のところでパスポート検査を受けただしょ。そのとき、指紋と写真を撮られたりしたわ。それにこれから滞在する宿泊するところの住所も訊ねられたわ」

「そうでしたか。日本に入る外国人はすべてが、指紋と顔写真を撮られ、それに泊まるころの住所を知らせるのですか」

「ええ、わたしが前回の二十年前に日本に来たときは、そんなことはなかったのに」

「今はテロ対策や難民の受け入れに、問題が生じているからでしょう」

「でも、指紋を取られるのは何か嫌だったわ」

その会話を聴いていたパパが、ママに言ったのだ。

「時代がそうさせているので、しかたないよ」

お城の八階にある展望台に立ったボクたち。と、パパが声を出したのだ。

「天守閣からの眺めはいいね。真下に堀も見え、五月の陽をいっぱいに浴びている大阪市が一望でき、心が広がるようになるよ」

しばらくしてから、城外に出ると、ママが、「日差しが強いわ」と声を出しながら、ひとり五十メートル先へ向った。そのあとについて行くと、ママは小さなお店の前で止まり、丸太でつくられた椅子に腰かけたので、ボクもパパも座ったのだ。

少しすると、パパの友人が、ボクとママにはイチゴ汁、パパにはレモン汁のかかった氷のカップを小さなテーブル上に置いたのだった。

それを食べていると、ママが、

「日本で暮らしていたとき、暑い夏はこのようなカキ氷を口にしていたわね」

と声を出しながら、小さなスプーンで雪のような氷を口に運んでいた。

食べ終えたあと、ボクたちはミニ電気バスに乗ったのだ。ボクが歩いている人たちに手を振ると、同じ服を着た人も手を振り返してくれるのだ。パパが、「中学生だろうな」と言ったあと、その友人にボクの行為を説明しはじめたのだ。

「息子は、通りに歩いている人たちと出会うと、知らない人でも手を挙げる仕事をよくするのだ。そうすると、すれ違う大体の人は笑顔で、『ハロー』と声を出すのだよ。彼の挨拶なのだろうな。それに反応を楽しんでいるのだよ」

バスを降りてから、昼食を摂るために大阪の市場へ向ったボクたち。

その人が案内したところは、魚料理専門のレストランだった。店内に入ると、水槽があって、そのなかに何匹もの大きな魚が泳いでいた。生きた魚を目にしたことがないボクだったので、じっと見ていた。と、パパが寄ってきて、

「あれらは、みんなフグだよ」

と、教えてくれた。ボクは、なおも泳いでいる魚をのぞいていた。

テーブルにつくと、ふぐ料理が次々と運ばれてきた。ボクたちは、「おいしい、オイシイ」と声を出しながら食べ続けたのだった。

ママとボクは、ふぐの毒を気にもせずに口に入れていた。ボクはふぐの唐揚げ、ママはふぐの鍋をすべて平らげたのだった。

お腹が満腹になったら、眠たくなってしまったボク。それを見たパパが友人に、「すこし早いが、予約したホテルへ行ってくれないか」とたのんだのだ。

再び車に乗って、これから一泊するホテルへ向ったボクたち。

室内に入ると、二十四時間以上も眠ってなかったせいだろう、三人ともベッドに横になると、ばたんきゅうだ。

二時間半ほどしてから、目が覚めたボク。ママとボクはシャワーに浴び出し、パパは部屋から出て行ったのだ。

少しすると、ホテルの近くのお店で購入したのだろう、お握りを手にして戻ってきた。パパだった。それを食べはじめると、パパがママに言ったのだ。

「日本の米は旨い。この味だ」

「あなたの作るお握りも、おいしいわよ」

一時間ほどすると、パパが、「もう十時だから、寝よう」と言ったので、歯磨きをしてからベッドに入ったボク。明日待望の地を訪れるので、うれしそうな表情を浮かべていたママだった。そのママが部屋の電気を消したのだ。

ホテル内で朝食を摂ったあと、新大阪駅へ向ったボクたち。

駅の改札口で、速い列車に乗り放題のジャパンレイルパスを係りの人に見せてから、駅構内に入ると、パパはいくつも並んでいるお店に行き、昼食用のお弁当三つを持って出てきたのだ。

列車に乗って少しすると、お腹が鳴ったので、お弁当を食べ出したボクたち。

ママとパパは、しあわせそうな顔を浮かべながら食べていた。もちろん、ボクもだ。パパが、

「お弁当を食べて、日本人を知る」

とつぶやくと、ママが、

「ご飯の上ののっている様々な色合いがいいわね。このお弁当箱、気に入ったわ。ドイツに持ち帰ることにするわ」

と、言ったのだ。

広島駅に着くと、インフォメーションセンターで宿探しをはじめたパパ。

少しすると、センター前で待っていたママとボクのところに来て、パパが言ったのだ。「広島カープの野球試合があるので、市内の安いホテルはどこも満室だと断れてしまったよ。仕方ないので、ここから新幹線の列車に乗り、十分ほど走ったところの東広島駅に行くことにしたよ。その駅近くに、安く泊まれるホテルが見つかったのだ。そこで、三泊するよ。夕食に、カレーライスを無料で提供しているらしい」

それを聞いたボクは、うれしくなった。日本にいた時分から、大好きなメニューだったからだ。

夕方、ホテルに着き、それからカレーライスを食べ出したボクたち三人だった。

翌日、ホテルで朝食を摂ったあと、ママがぜひ訪れたかった平和記念公園へ向ったのだ。晴れ上がった青空の下、広島駅から電車に乗って、目的の停留所で降りてから歩き出したのだ。

パパは、ここを二回ほど訪れているのだ。そのパパから、公園内に何かあるかを前もって聴いていたママ。それが目の前に現われるので、ママの足取りは弾んでいた。ボクが住んでいる街で、平和運動を繰り返しているママなのだから。

すこし行くと、パパが原子爆弾によって全焼したドームを見ながら、ママに何かを話しかけていた。

再び歩き出して、少し行くと、川に架かっている橋の上に立ったボクたち。と、一人の女性が手元を持っているものを通り過ぎていく人たちに渡していた。ボクも、その人からシippoを引くと羽が動く、折り紙の鶴を一羽貰った。

それを動かしていると、ママがパパに言ったのだ。

「今年の八月六日は、この鶴をテュービンゲン市民と一緒に折りましょうよ」

さらに歩いて行くと、パパは立ち止まり、ママに説明しはじめたのだ。

「高さ九メートルの頂上に、折り鶴を捧げ持つ少女のブロンズ像だよ。千羽鶴の塔と呼ばれているね」

その像をずっと見続けていたママだった。

再び歩き出すと、大きな石造りの屋根前で手を合わせたパパ。その隣で、ママも目を瞑っていた。パパが話し出したのだ。

「あの奥に、燃え続けている炎は、『核兵器が地球上から姿を消すまで燃やし続けよう』との願いを託しているのだよ」

再び歩いて行くと、パパが目の前を建物を見ながら、

「ここが平和記念資料館。平和の尊さを考えさせられるところなのだ。今は工事のため、全館見ることができないが」

と言ってから、なかに入ったのだ。ママもパパも館内に展示されている写真や資料のパネルを目にしながら歩いていた。



少しすると、ママが被爆者証言ビデオコーナーのところで立ち止まり、テレビの画面前に並んでいる椅子に座り、写し出される生き証人のことばに耳を傾け出したのだ。日本語も英語もわからないボクは、パパに連れられて館内を廻ることになったのだ。

しばらくしてから、ママのところ戻ると、ママはまだ画面を観続けていた。ボクたちが来たことを知ったママは、椅子から立ち上がり、再びパネルを見るために歩き出したのだ。

一通り見学してから館外に出ようとすると、ママがパパに言ったのだ

「生き証人たちが話す内容には、身をつまされてしまったわ。あそこで、もっと話を聞き続けていたかったわ」

ママは、さらに続けたのだ。

「館内のいくものパネルを見ていたけれど、以前あなたがわたしにすこし話してくれた、原爆がなぜ落とされたかを詳しく説明したパネルがなかったように思うの」

「そうだね。なぜ、戦争に走ったかの詳しい分析と解説がなかったね」

「わたしは、そのことをもっとよく知りたかったのに。未来を見つめるためにも、それは必要でしょ？」

「そうだね。それなら、案内所にいた人に、きみの知りたかったことについて訊ねてみてはどうだろうか？」

「そうね」

パパは早速、案内所に行き、ママが知りたがっていた内容を話すと、英語を話すボランティアの人が、ママに詳しく説明してくれることになったのだ。

ママは椅子に腰かけて、その人と英語で話しはじめた。退屈になったボク。それを見たパパは、ボクを連れて館外に出たのだ。

三十分ほどして戻ると、ママはその人とまだ話をしていた。ボクたちが戻ってきたことも知らずに、耳を傾け、肯きながら聴いていたママだった。

その二人の会話が終わったあと、パパがその人に訊ねたのだ。

「アメリカにも、このような資料館があるのですか」

「いや、ありません。今まで、アメリカは正しいことをしたとの認識でずっといましたので。でも、ここ十年来、原子爆弾を落としたことは、愚かだったと思う人も出てきたようですが。昨年の追悼式には、はじめてアメリカのオバマ大統領が出席しましたし……」

パパとママは、その人が話す内容に耳を傾けていた。

最後に、その人が言ったのだ。

「戦争は無くなりませんが、核戦争はなくなると、私は信じています」

それを聴いたママが、その人に話したのだった。

「毎年八月六日、私たちが住んでいるテュービンゲンでは、この日を『広島の日』として、街の広場で平和運動をしているのです」

「それは、よい活動ですね、続けてください」

「はい、また新たな気持ちでやっていきます。戦争のない世界を目指して。このような悲惨な場を、世界で再び起こしてはなりませんので」

隣にいたパパも、話し出したのだ。

「核兵器廃絶を訴え続けていきます。世界でこのようなことが、再び生じないように願

ながら」

ボクたちはかなり長い時間、この公園にいてから、再び路面電車と新幹線の列車に乗り、ホテルに戻ったのだった。

翌朝、朝食を終えてから、ボクたちは再び速い列車とゆっくり走る電車に乗って、潮の香りがするところで降りたのだ。と、目の前に大きなフェリーが浮かんでいた。それに乗ったボクたち。

十分ほどで桟橋に着き、海岸沿いに歩き出すと、何頭もの鹿が食べ物欲しさに近寄ってくるのだ。ボクは犬が近くに来ると、避けるが、鹿は怖くない。

パパがママに、「それにしても、鹿の数がなんと多いのだろう」と言ったあと、さらに続けたのだ。

「海に浮かぶ大鳥居や朱色に囲まれた回廊の厳島神社など、この宮島には、伝説に残る史跡がいくつもあるよ」

「島全体が歴史なのね」

そう声を出したママに、パパが訊いたのだ。

「昨日の見学のことが、頭から離れないのでは？」

「ええ、朝早く目が覚め、それからというものは、広島でいのちを落とした人たちのことを考え続けていたわ。あそこで、苦しみ、悲しみを体験した人の生を」

「歴史の鏡には、苦しみや悲しみの姿が映るのだろうな」

「そうね。それを、こんどは未来にも伝えるためにも、あの公園は尊いものとなっているわ」

パパとママは、しばらく立ち止まって黙り続けていた。

再び歩き出すと、ママがパパに言ったのだ。

「どこを歩いても大勢の人ね」

「そうだね。今日は日曜日、それに母の日なので家族でここに来ているのだろう」

再び、フェリーに乗ったボクたち。海をほとんど見たことがなかったボク。風に揺られて輝いている海面を眺め続けていた。どんな乗り物でも好きなので、それだけで楽しくなってくるのだ。そのボクの様子を見て、にっこりしたママだった。

フェリーから降りて、広島駅へ向っている電車内で、ママがパパに言った。

「日本の車掌さんは、お客さん一人ひとりに親切だね。優しいことばかけをしているわ」

ホテルに戻ったあと、パパが、

「さあ、明日からは東京だ」

と、声を上げたのだ。

朝食を摂ったあと、新幹線の予約席に座ったボクたち。生まれ育った地へ行くのが楽しそう。パパ。長く住んだところは、パパの気持ちを弾ませていたに違いない。

東京駅に列車が停まると、日本から年に一回はボクたちの家を訪れているマリが、窓の外で笑顔を浮かべ、手を振っていた。ボクも笑顔で手を振り返したのだ。

列車から降りると、頬と頬を合わせ、抱き合ったママとマリ。ボクたちは再びリュックを背負い、再び歩き出すと、パパがボクに、「今日から三泊する東京セントラルユースホ

「ステルへ行くよ」と言ったのだ。

こんどはゆっくり走る電車にすこし乗ってから、小さな駅で降りると、目の前に高層ビルが立っていた。そのなかに入り、エレベーターで十八階にあるユースホステルに行ったのだ。

パパが受付で手続きをはじめたあと、ボクたちはシーツを手にして部屋に入ったのだ。と、パパが窓から外を見ながら、

「この大きな窓から東京の景色が眼下に一望でき、まさに大都会の展望だ。下に飯田橋駅も見えるな」

と、声を出したのだ。そのあと、ボクたちは二段ベッドにシーツをかけはじめたのだ。ボクとママは下、パパは上だ。

それが終わると、マリがユースの食堂へ行き、数分後、熱いコーヒーを持ってきたのだ。それを飲みながら、部屋内にあったソファアに腰かけて、話をはじめたボクたちだった。しばらくすると、ボクのお腹がグーと鳴った。それを聞いたマリが、ボクたち三人に、「すこし早いけど、どこかで夕食にしましょうよ」と言い、ママに、「何か、食べたいものはありますか」と訊いたのだ。

「まだ、おそばを食べてないわね」

「それでは、ビル近くにお蕎麦屋さんがあるから、そこに行きましょう」

お店に入り、トロロそばを食べ出したボクたち。皆、「美味しい、オイシイ」と声を出しながらの食事となったのだ。

その夕食を終えたあと、マリは自分の住いに帰っていったのだ。

十八階の部屋に戻ると、パパがボクに、

「寝るまでには、まだ時間があるので、これから一緒にお風呂に入ろう」

と言ったので、ボクはパパと一緒に十九階にある大浴室へ向ったのだ。

広い浴室には、ボクとパパ二人だけだ。大きな窓には、外の夜景がよく映っていたので、それを眺めていたパパとボクだった。

パパは、湯船に浸かりながら目を瞑っていた。そのパパが湯船から出たあと、ボクに、「背中を流してほしい」

と言ったので、タオルでパパの背中を撫でるように洗ったのだ。と、パパが、

「もっと強く」

と声を出したので、ゴシゴシ洗ったボクだった。

再び、湯が昇っている浴槽に入ると、パパが、

「やはり、日本の風呂はいいな」

と、つぶやいたのだ。

ボクたちが部屋に戻ると、ママはいなかった。少しすると、ママが戻ってきた。

「このビルの下にある本屋にいたわ」

いつもより大きな目をして言い、さらに続けたのだ。

「三十九年前に、日本にいたときに買った五冊の絵本が、今も売られてあったのには驚いたわ。それらの本をかうか迷ったわ」

「もちろん、きみが購入したいなら、そうすればいいのでは」

「そうね。その本は、発行して一九七刷、九八刷など、今も日本の子供たちに読まれてい

るのよ。いい絵本なのね」

そう声を出してから、部屋を出て、再び本屋に行ったママ。そのあと、五冊の絵本を手にして戻ってきたのだ。昔、幼稚園の先生をしていたママだ。

翌日、ユースの食堂で朝食を摂ったあと、ボクたちはパパのお兄さんが住んでいるところへ向ったのだ。そのあと、パパのお姉さんと妹、それに八十九歳になる伯母さんたちの食事だ。テーブルを囲んでの十人の賑やかな時間となっていたのだ。

親戚の人たちと昼食をしたあと、こんどはパパのお父さんとお母さんが眠っているお墓を訪れたボクたち。

パパは手を合わせ、ずっと目を瞑っていた。そのパパが、ママに言ったのだ。

「二人とも、七十歳を前にして亡くなってしまった。自分の歳には、もういなかった。もつと生きていてほしかった。残念でならない」

墓地を出たあと、パパが、「近くにある浅草の雷門に行くよ」と言ったので、そこへ向ったのだ。

目的地に着くと、ボクたちのような外国人が多くいて、至るところで、皆写真を撮っていた。とても賑やかなところだ。パパが、ママに言った。

「歩いている人の九割近くは、欧米人や中国人や韓国人、それに南アジア人だろうな」

ママは通りで軒を出しているお店の前で立ち止まっては、日本模様の財布を買い、パパは好きなおせんべいや饅頭のお店をのぞくように見ていた。

かなり歩き続けていたので、ボクは疲れてしまい、ゆっくりと歩くようになってしまった。それを目にしたパパが、「ユースに戻ろう」と言ったのだ。

ユースに着いてから、一人で部屋を出たパパ。

少しすると、夕食用のお握りと稲荷寿司、それに巻き寿司を持って戻ってきた。それらを食べながら、部屋の大きな窓に映る夜景を見ていたボクたち三人。

それが終わると、ママがパパに言った。

「このビルの下で、百円ショップの看板を見たわ。ちょっと寄ってみたいわ」

「よし、それでは三人で行ってみるか」

食料品から文房具、その他何でも百円で売られているショップに入ったのだ。パパとママは興味深そうに一つ一つ手にとっていた。

ボクはお握り用のパック五つ、ママは小さなカップ、パパはボールペンとノートを買ったのだ。パパがママに言ったのだ。

「こういうお店はいいな」

「一つひとつ、見ているだけでも、楽しくなるわ」

満足そうなママの顔だった。

次の日、ユースを出る前、パパがボクに言ったのだ。

「今日は、数人と時間を違えて会うことになっているよ。その人たちは、チュービンゲンを訪れたことがあったので、顔を見ると、きみはわかるかもしれない」

結局、合計で六名の人と会ったが、ボクはやっぱり名前など忘れていた。でも、八十四歳と八十六歳の人の顔は覚えていた。というのも、チュービンゲンのボクたちの家に何回も来たことがあったからだ。

その人たちとお辞儀をして別れたあと、パパは立ち止まって振り返ったのだ。今も手を

振り続けている二人に、何度も手を振っていたパパだった。

パパがママに言った。

「あのご夫妻とは、花を媒介にしてコンタクトが今も続いているね。チュービンゲンの植物園にも一緒に行ったし、日本から花に関する本が何冊も送られてきたこともあったね」

「そうだったわね」

「日本で会うたびに、ドイツの花の種を渡したりもしていたからね。もうドイツには、行けそうにもないとも言ったね。ご夫妻がずっとこちらを見続けていた姿に、何とも言えぬ気持ちになったよ」

「わたしもよ」

翌日、再び列車に乗ったボクたち。

しばらくすると、パパがママに言ったのだ。

「あと三十分で、私たちが暮らした土浦だ。きみにとっては、思い出の多い地だね」

「もちろんよ。彼が地域幼稚園に通い出し、特別支援学校には一年半近くいたし。合計六年半もいたところだわ。それにあなたのトライブラリーに、彼を連れて毎日曜日には行っていたし」

「そうだね。そこで、坂本九さんとも会ったりもしたね」

「『幸せなら、手をたたこう』の歌を、今も覚えているわよ」

ママは小さな声で、歌を唄い出したのだ。

「土浦の地は、わたしにもいろいろな思い出があるよ。大学を出てから施設で直ぐに働き、おもちゃ作りに心を燃やしたりしていたところだったからね」

パパはさらに続けたのだ。

「その地にこれから行って、昔の知り合いの人たちと話をしたりするのが楽しみだ」

「それは、わたしも同じよ。幼稚園や特別支援学校で知り合ったお母さんたちと会えるし。とくに、同じダウン症の子を持ったお母さんから、何回も家に招かれていたし。そのお母さんに、当時何かと助けられたわ。再会が楽しみだわ」

二日間、多くの人と会い、楽しそうにしていた。パパとママだった。

次の日、R君の家へ向かったボクたち。ママは、とくにR君のお母さんと会うのを楽しみにしていた。ボクも、それは同じだった。

ボクたちがR君の家に着くと、玄関先でR君が待っていた。ボクは、R君を覚えていなかった。でも、お互い、にこにこ顔で握手をしたのだ。

靴を脱いでから、ボクたちは家のなかに入ったあと、ママとパパ、それにR君のお母さんとお父さんはソファに座りながら話をはじめたのだ。

ボクはR君に連れられて、彼の部屋に行き、お互い肩を組みながら、日本の童謡を家庭用の小さなカラオケから流れるメロディーに合わせて、マイクを持って声を張り上げたのだ。と、ママたち四人が寄ってきて、ボクたちの様子を見ていた。

パパが、R君のお母さんとお父さんに言ったのだ。

「ことが通じなくても、コミュニケーションができる二人。とてもいいですね」

「二人がひとりになったようだわ」

R君のお母さんがそう応えると、パパがママに言った。

「二人は、それぞれの個性を出して、それがまさに溶け合うようになっていて、私たち親は感じるね。二人に、何か共通する心があるからだろうな」

「そうね。お互いが素朴なまでに、受け入れあっているわね。彼ら二人だけでなく、私たち親たちも、お互い共有できる心を持ち合わせているわ」

「そうだね。わが子を育て、その過程のなかで厳しさを味わったと同時に、あるがままに生きている彼らから、多くのことを学び、よろこびを知った私たち親だ。それに最後まで、彼らのことが心の奥底に残り続ける私たちでもあるのだ。それを、共有しているよね」

「その通りだわ」

さらに声を合わせて唄い続けたボクたち二人。それを見ていたパパがママに言ったのだ。

「楽しそうだね」

「たのしいのよ」

「シンプルな気持ちで、今を楽しんでいる二人。素晴らしいな」

ママとパパ、それと、R君のお母さんとお父さんも、笑顔でボクたち二人を見つめていた。

## 第二十四章 再び、ママとパパと暮すボク

今まで住んでいたグループホームを出ることになってしまったボク。そのことについて、ママとパパが話し合っていた。

「ミヒヤエルと再び家で一緒に暮らすようになって、ちょうど一年が過ぎたわね」

「そうだね。彼がグループホームで、生活ができなくなるとは、夢にも思わなかったよ」

「それは、わたしも同じよ」

「彼を長年ケアしていた担当の人が、お産のために辞め、それと同時にホーム長が替わり、今までのように彼をケアすることが難しくなって、責任をもてなくなったと判断したのだろうな。ミヒヤエルは、自分の居場所を失ってしまったのではないだろうか」

「そうね。たしかに、四十歳を過ぎてからのミヒヤエルは、寝る前に紙おむつをするようになったし、時々大声を発したりするし、今までとはすこし違ったような行動をとりはじめたわね」

「そうだね。午後九時から 翌朝の六時までケアする人も当直者もないグループホームなので、ホーム側に負担が増してきたことは、たしかなのだが。たしかに、彼と同居している仲間たちは、皆ことばでのコミュニケーションは十分にできるよね。ミヒヤエルはできない。彼らと較べたら、ミヒヤエルは知的能力が極端に低いからな」

「でも、そうしたなかで、彼は十四年間一生懸命よくやってきたと思うわ」

「同感だね。彼は、居心地のよい自分の居場所を見つけ、暮していたけれど。ホーム側の言い分も、わかるところがあるが。それでもと、言いたいね」

「こんどのホーム長は、ミヒヤエルのような重度の人たちが住んでいるところを推薦してくれたけれど、そこは家から三十キロ以上も離れたところだったね」

「きみは、最初からそこには行かせないと断ったね。同じ思いだったよ」

「テュービンゲン市内には、重度の人たちが暮らしているグループホームはあったけれど、そこは待ちリストがあつて、四十名がすでに申し込んでいたわ」

「そのことを、きみはテュービンゲン郡の行政機関に手紙を書いたら、四日後に返事があつたよね。二年後に、重度の知的発達遅滞がある人たちが暮らせていけるグループホームを新たにテュービンゲン市内に建てる計画があるので、それまで待つてくさいとの返事だったね」

「ええ、そうだったわ」

「そのとき、ミヒヤエルと一緒に再び暮らすのも、またいいものだと思つたね」

「でも、あなたは三年前、大学病院で一週間入院し、そのあともステロイド薬を飲み続けている身だし、果たして彼と一緒に暮らせるかと心配したわ」

「たしかに若いときは違う体になったけれど、彼と一緒に暮らすことをよろこんだよ。それよりも、きみは膝の関節炎を抱えていたので、なかなか自由に歩けない体、それに糖分を控えめにしなければいけない身だし。でも、二人でやることは、していこうと話合つたよね」

「そうね」

「ここ一年間、彼と暮らしていたが、紙おむつを必要としなくなつてきたし、大声を出すこともなくなつてきたね。たしかに、心身の衰えを見せはじめた彼だが、毎日浮かべる笑顔は、以前よりも増したよね」

「ええ、そうね」

「いつもあるがままにいるミヒヤエルだ。その彼のよつて、よろこび、生かされている自分たちだ。それがあるがままに見つめよう。それと、再び行政機関から手紙をもらい、そこには、あと二年半した二〇二二年の冬か、二〇二三年の春までには、重度の人たちが暮らせるグループホームを市内に建設する予定と書かれていたからね」

「そうだったわね。そうなつてほしいわ」

「先日はうれしかったな。彼がひとりで自分の部屋に行つて、ベッドに入った頃、私と君とが、彼のところに行つて『おやすみ』と言つたとき、彼は私たち二人を見て、『パパとママは一緒』と言つてにつこりしたね。そのとき、思つたよ。笑顔は、希望をもたらせるのだと、あの笑顔は、最高だったよ」

「彼、今の状況がわかつてきたようよ」

「先のことはどうなるか、予測つかないが、父親として母親としてやることをさらに続けて、毎日、心楽しく過ごしていこう。彼は、かれなりにやっているし」

「そうね」